〔質疑応答〕

○須藤　どうもありがとうございました。

あと時間的には１０分かそこらなのですけれども、例によりまして今まで１時間半余りお話をいただきましたので、まず質問あるいは伺った話についての意見でも結構ですけれども出して頂きまして、その過程で先生が初めおっしゃいましたように何か議論のような形に進めばと思っておりますけれども、いかがでございましょうか。

○今井　専門員の今井です。

非常におもしろい話で、哲学的な問題から技術的な問題と非常に広範囲にわたって非常におもしろく示唆深いお話だったと思うのですけれども、１つちょっと実際にＰＥＰＡＳでお仕事されたときの経験を踏まえてお話をしていただくとありがたいなと思うのですが、技術移転の問題なのですけれども、技術というのは技術学と技術というのは違うと思うのです。学としての技術というのはそれはそれで１つの分野としてあると思うのですけれども、ＪＩＣＡなどがやっている日本の技術協力の技術はまさに適用されなければどうしようもないわけです。そうしますと、その技術が向こうの国に適用されるのか否かというそういう判断がまず必要だと思うのです。そうしますと、そこで先ほど先生がいろいろ言われたものと非常に深くかかわってくると思うのですけれども、まず向こうの国の状態はどうなっているのか、それからどういうコンストレィンツなんかがあって、あるいはその技術を受け入れるアクセプトできる基盤があるのか、人材的にどうなのか、社会的にと、いろいろな問題が出てきて、非常にそういう意味では本来その技術の移転ということだけを考えても日本の技術なり技術の考え方、システム全体にそのままホイと持っていくというのがいけないというのは理論的に非常にはっきりしていると思うのです。しかしながら、いろいろな条件があってなかなかそれがうまくいかないというのが１つ今我々が抱えているコンストレィンツの非常に大きな問題だと思うのです。

一方、ひるがえって逆にちょっと質問、ぜひお話をお聞きしたいのですけれども、途上国の開発担当の人はそこら辺の自分達がいろいろ先進国から協力を得てやっているそういう技術協力について、日本の技術をそのままもらってしまう問題、あるいは開発協力の中で環境の問題について何か考えなければいけないのではないかというような、そういうマインドが今出てきているのかどうか、特に途上国の開発担当の方。そこら辺、先生が実際にマレーシアでやったいろいろなケースでいろいろお考え、遭遇したことがおありになると思うので、そこら辺、特に開発関係の人がそういう技術と環境の問題についてどんな考えを持ってあるいは変化のサインがあるのかどうかとか、そこら辺をちょっとお聞きしたいなと思ったのですけれども。

○中村　それは全くないといったら語弊があると思うのですけれども、課題は非常に大きいと思うのです。環境側のメッセージがまだ弱いと思います。一番影響が強いのはバンクなのですけれども、御承知のとおり昨年の４月かそこらに世銀は世界中で環境問題の専門家、特に社会科学的なアプローチをできる専門家、を６０名新たに入れるということで、今そういう方向に向かっているらしいです。アジ銀でもつい最近２人ばかり新しく入ってきた。文化人類学とか社会学とかそういう分野から開発に。先ほどのインテグレイテェド・エコノミック・アンド・エンバラメンタル・ディベロップメントの中で、ソシオエコノミックの部分にどう対応していくかというようなことです。

開発関係の人が切実な問題として、感じているかどうかというのは、全体的に眺めると非常に微々たるものです。実は国際湖沼委員会、国連の地域開発センターと我々が今共同でプロジェクトを進めるのも実はそういうところに主眼があるわけです。国連開発センターの方は開発プランナーなのですけれども、エコノミック・プランナー、リージョナル・プランナーの集まりというかそういうことをターゲットとしたグループなわけです。そことＵＮＥＰが、河川・

湖沼を特定してそこで共通のメッセージを流していこうという計画です。こういうことは非常にユニークというか、非常に少ないわけです。この間ちょっとお話ししていましたら、やっと湖沼の問題ともう一つ廃棄物の問題が動きかかっているということですが、十幾つあるかのプロジェクトのうちのほんの１つか２つという感じで、やはり開発主導というか、これに環境問題が食い込んでいくというところまではまだいっていないのではないかという気がします。それが確かに問題です。その辺は具体的にどういう方法をとったらいいのかというようなことは私もちょっとわかりかねますけれども、確かに問題だと思います。

それからもう一つは、先ほどの適正技術の話です。私が実はきょうもこれから会議があるのです。厚生省の適正技術検討委員会というのがあるのです。これはどういう委員会かというと、要するに適正技術マニュアルをつくろうということで動いているのです。私も声がかかりまして行っているのですけれども、実は先ほどの技術学と技術の違いというようなことをおっしゃられたわけですけれども、適正技術というのも私は適正技術１、適正技術２があるのではないかと。適正技術マニュアルをつくるということで、例えばこういう土地ではこういう塩ビ管がいいだとか鋼管が手に入らなかったらこうしたらいいとか、要するに技術協力する場合に資材の供給をスムーズにやって、現地の維持管理体制を踏まえた上でどういうふうな援助したらいいのかというようなことについてマニュアルをつくろうといことで動いているわけです。もちろんそういう経験を踏まえた方が入ってこられているわけです。適正技術２の話だとそういうことになるとは思うけれども、それで問題が解決したようには思わないということを私が言うわけです。

ところが、ＪＩＣＡの場合も同じだと思うのですけれども、ＯＤＡがやはり膨らんでしまってどうしようもないわけです。何とかしなければいけない。何

とかプロジェクトを消化しないといけないけれども、せっかく消化していてやいやい言われるのは大変だ。少なくとも何か考えたというようなことがわかってもらえるようなものが要るのではないか。余り本質的な議論をここでやっても答えはすぐ出ないのだし、とりあえずそういう形で動きましょうと動いている委員会なのです。私はそれはそれでいいと思うのです。適正技術２の話にこれはもう枠を決めましょう。とにかくそれはないよりはいいわけですから。ただ、それが適正技術１の話につながるとも思わない。ただ私が話したようなところまで考えようとするような人の芽をつむようなことをしてくれるな、そういうことを言っているのです。

これは難しい話だし大事な話なのだから、やはりそういうことをまじめに考える場を提供してもらわないといけないし、それからそういうことを真剣にとらえていくということを適正に評価する、これが日本の場合には欠けているのです。それを評価してくれる組織も制度も何もないわけです。今のようなことを考えるということ、これが非常に私は大事な問題だと思うのです。芽をつむ非常に大きな原因になっているのではないかと思うのです。これは時間がかかります。こういうことをちゃんとまともにやろうとすれば半世紀ぐらいかかるだろうと思っているわけですけれども、今やはりそういうことをまともに考えるということをまともに評価するような制度なり支援組織なり何なりを考えていかなければ、こういうことを考えてある場に持っていくとその場がしらけてしまうということはおかしいのではないかと思っているのです。やはり難しいと思います。一概にこうしたらいいとか、これが解決法だというようなものはないと思うのですが、これは根が深いのではないかと思います。

○北林　無償資金協力課におります北林と申します。私はもともとはどっちかというと保健計画の方なのですけれども、これから水道の方の無償関係も担当し始めているところです。まだ具体的に仕事に入ってぶつかったことではない

のですけれども、例えばスラムの給水なんていうのがあります。スラムと言わないまでも都市計画の中でかなりディスアドバンテージで失業率の高い地域等に給水をするというような要請があってくる場合、今おっしゃったとおりどのパイプがいいか、太さはどの程度か、ポンプは１台にするか２台にするか、給水の人口はどのあたりで決めておこうか、そういうことは調査をして決めて施設をつくります。もともとの社会的な状況でその都市がかなりインフラが脆弱で水道料も取れない地域であるとか、そういったことが問題になってこないかなと、これはかなり素人考えで思うのですけれども、残念ながらそういうところについてかなり突っ込んで調査をしたりあるいは相手国にアドバイスをするというシステムというか、なかなかこちらの方も対応できない状態にあります。例えばＷＨＯの給水計画ですとか、今例えばダィアリア・ディジーズの関係でコングラトリー・ウォーター・サプライみたいな感じで進めておられる場合に、そういった貧困地域のインフラみたいなことに関して、今事前評価みたいなものというのはないのでしょうか。

○中村　実はそういうところを中心に－中心にといったらおかしいですけれども－ＷＨＯはやるわけですけれども、結論から言うとそれがうまく計画がされて実行されているという例は世界的にも少ないだろうと思います。インドネシアのキップスですか、いわゆるスラムの改善計画というのを世銀でやりました。あれは非常に珍しい例で、非常にうまくいっている例であるということが言われています。今の話のようにもう少し技術的な方法が出てくる背景のところをちゃんとやらなければいけないということをＷＨＯが数年前から言っているわけです。一方ではＭＥＰ（ミニマム・イバレーション・プロシージャー）というようなものを出したりしているのです。これは最低限どういうような要素を考慮して、事後評価はどうしてというようなことをかなりソフトに考えたものなのです。一方でそれがあると同時に、８３年から８５年にかけて９つの地域

でコミュニティ・ウォーター・サプライ・サニテーションのケース・スタディをやったりしているのです。

その中で、非常に主体的にやったソシオロジストがいました。２年ばかり幾つかの限られた地域に住み込んで問題の構造を掘り起こして、計画につなげるようなメカニズムを探っていきましょうと。それを含む９つケース・スタディの結果を１つのドキュメントにしてニューデリーのオフィスで出したのがあるのです。それはコミュニパティシペーションから、インスティテューション・ディベロップメントから技術的にどんなパイプがいいとかというような話までも含めてやりました。それですべてがうまくいくとも思ってないし、要するにＷＨＯとしてもそういうことをなるべく深く掘り下げていきながら実態に即応していこうということを進めている段階です。ですから問題は、ＪＩＣＡが抱えている問題と同じだと思うのです。ただ対応の仕方にそれぞれ工夫をしながら、トライ・アンド・エラーをしながらやっている。その中からたまにヒットが出るという感じではないかと思うのです。それが積み重なって全体が変わっていくという感じで非常にスピードの緩やかなものなのですけれども、それが１つ。

もう一つは、ダニエル・オークンというノースカロライナの水道工学の生みの親と言われる人の話です。ノースカロライナ大学の環境科学科には先ほどの評価の問題ではないですが開発途上国の水問題を専門的に研究するプロジェクトがあります。そこでは開発途上国の連中が来たり、そこが中心となってＰＡＨＯ（パン・アメリカン・ヘルス・オルガニゼーション）と南アメリカのスラムあるいは農村、集落水道、下水道をずっと継続的に研究してきているわけです。それからＵＳＡＩＤがつくった、バングラデシュにインターナショナル・リサーチ・インスティテュート・オブ・ダィアルディジーズがあり、そこと共同して研究を進めているわけです。ですから、研究成果を踏まえた上でプロジ

ェクトにどういうふうに反映していくかということが大事です。成果が具体的に大きく上がっているというわけではないですけれども、そういう姿勢が強く出されているというぐらいのところです、今のところは。もちろんカルバマッテンが部長だった世銀のウォーター・サプライのディビジョンがこの１０年ぐらいそういうところに力を入れてやってきた。ただ、カルバマッテンさんもやめてしまった。あそこはやはり水道部門がアーバン・サービス・ディビジョンかなんかの下にあるのですけれども、ほかの橋梁だとか道路と一緒の部門にあるということでやはり体制としてはルーラル・ウォーター・サプライに対してシンパシティックではなかったーこれは３年ほど前の話なのですけれどもーということを盛んに言っていました。

ですから、結論としては、やはり一朝一夕にできるものではないし、日本は日本の協力を進めていく上でアプライド・スタディーズというか、そういうことが必要ではないか。そういうことをまともに取り上げるということに対して積極的に支援体制が出てくるということが、やはり全体のレベルを上げるということにつながるのではないかという気はします。

○山田　工業調査課というところにいる山田と申しますけれども、工業調査課というところで工業分野のプロジェクトのＦ／Ｓを担当しているのですけれども、今、中村さんからお話が出ているような包括的な環境問題に対する取り組みというのは工業調査課というところではやってないです。工業プロジェクトをやるに当たってどの程度考慮しなくてはならないかという話になると思うのですけれども、それ自体余り今のところははっきり問題提起されてないし、ガイドラインも何もないのです。工業分野ということになりますと、日本の場合これだけ工業が発達しまして、特に環境問題については環境基準も相当厳しくて、恐らくほかの先進国とか途上国と比べても相当基準をする技術的なノーハウというものはあると思うのです。そうしたときにプロジェクトが要請されて

これからやろうとしたときに、既にそのプロジェクトはアイデンティフィケーションされてしまって、そういう枠組みの中で動かざるを得ないわけです。

そういうふうに考えたときには、先ほど課題と解決法の４つの絵がありましたけれども、かなり知識としても確実で、それを解決するためにはやはりこういう方法でやるしかないのだと。そのプロジェクトをやるということが決定されたという前提で、そういう中で話を進めなければならない場合が多いわけです。そうしたときに、現在ではやはりガイドラインも何もなくてレポートの中でもどの程度考慮しているのか、もしかしたら途上国の方では余り基準もないし問題はないのでしょうということで出してしまっている面もあるのですけれども、ではどういう配慮をしているのですかと言われたときに明確に説明できるような内容には必ずしもなってないのです。そういう意味で、私自身はやはり工業分野ということで今こういうものに参加して勉強しているのですけれども、中村先生が工業分野のプロジェクトというものについて考える場合にどういう点に注意して、あるいはどういう方向で工業分野の環境問題に対応していったらいいかというか、その特徴といいますか、そのあたりについて何か考え方があれば……。

○中村　工業分野の場合、例えば具体的なプロジェクトはどういう……。

○山田　具体的には、例えば製鉄所をつくりますとか、あるいは肥料工場をつくりますとかセメント工場をつくるとか、最近大分ソフトのプロジェクトがふえていますけれども、一応やはり資源開発とかそういう段階からワンステップ上がるとすれは、基幹産業である製鉄とかあるいは繊維とか肥料だとか、そういうのがこれまではやはり多かったのです。

○中村　そのプロジェクトの環境にかかわる部分ということ。

○山田　環境配慮というものをどのくらい……。日本ではかなり基準が厳しくてコントロール・イクィップナイトというものが確立されているわけです。そ

れをそのまま持っていけば途上国ではやはり十分過ぎるぐらいもしかしたら抑えることはできるわけです。ただどうしてもコストとの関係で、恐らく途上国で担当するところはやはり工業省とかそういうところですから、環境庁ではないのでどうしても安くいい経済性が計算できるような方向に持っていこうとすれば、どんどんそれを排除する方向に行くと思うのです、議論をしても。

○中村　それもいろんなことが言われているようです。私も余りそういうところにタッチしたことがないのですが、おっしゃるとおりだと思います。例えば昨年の１０月の末かな、タイでマルチ・ナショナル・コーポレーションの活動と環境問題のワークショップが何かがあって、そのレポートを送ってもらったのですが、それによるとタイの場合には、マルチ・ナショナル・コーポレーションが環境に対する配慮の仕方は非常によかったわけです。サーベィの結果では、むしろローカルのコーポレーションの方が非常にまずいという結果が出たのです。話はそれだけなのですけれども、それで私はちょっとおかしいのではないかと思って物の本を見たりしていました。問題の１つは、要するに裾野というか下請けというか、ベンチャーですね、地元の合弁企業とか、要するに製鉄なら製鉄で資源調達するわけですけれども、資源調達する裾野というのはローカルな企業になっているわけです。いろんなところで合弁していて、地元企業として完全に出資が９０％ぐらいになっている、ほとんど地元企業となっているようなところがズラズラッとぶら下がっているのですね、コーポレーションというのは見てみると。その一番根元の方はほとんど環境問題というのがだめなのです。親のファクトリー、いわゆる本社企業とか本社工場とかというのは非常にうまくやっているわけです。

そこら辺がさっきの経済の問題と非常につながるわけですけれども、例えば滋賀県の繊維工業というのが昭和３０年代ぐらいから東南アジアに移転しているわけです。インドネシアとかタイとか、要するに自由貿易地区（フリー・ト

レード・ゾーン）に入り込んでいって、極端に言えば滋賀県の繊維工業の統計は途上国に行かなければわからないわけです。向こうを押さえなければ滋賀県の経済状況がわからないわけです。そのぐらい今の経済というのが非常に錯綜してしまっているらしいのです。経済地理の専門家が滋賀県のことをやっているのですけれども、その人はマレーシアへ行くわけです。マレーシアの方から起こしてきた統計と滋賀県の統計を合わせながらやっていかなければ滋賀県の問題はわからないというぐらい錯綜しているわけで、１つはそういうことがあるのではないかと思うのです。

一方では、例えば、環境庁でも言っていましたけれども国際環境影響評価制度というようなことで、制度的にそういうものを育てるということは必要があると思います。もう一つはキャスケード的にどういうふうに食い込んでいっているかという構造がわからなければきめの細かい配慮というのは環境問題に対しては難しいのではないかと思うのです。やはり環境問題というのは１つこうやったら解決というのではなくて、全体をやらなければ、きめ細かく配慮しなければ、しかもある時点でこう変わりましたというものではなくて、ある時点でフッと見たら、ああ変わってきたのだなということがわかる程度の感じでしか動かないと思うのです。こう手を打ったらあしたからこうなるというようなものではなくて。ということはやはりいろんなところで全体的な手を打ちながら、布石をしながら動かしていくという、その布石の構造みたいなものを、私は具体的にどうしたらいいのかちょっとわからなくて申しわけないのですけれども、そういうことがあるのではないかなという気はいたします。だから、案外一見簡単そうな問題でも実は非常に根が深い構造があるのではないかという気がします。

○須藤　ほかにございませんでしょうか。

－なければちょっと時間が過ぎました。先生は次の会議を控えておりますの

で、これで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

<配　布　資　料>

Ⅰ．開発途上国の水質環境問題と技術協力

1．開発途上国の環境問題に対する関心のたかまり

（わが国における開発途上国、とくにその環境問題に対する最近の関心のたかまりの背景は何であろうか。）

＊　国際社会の中における日本の役割の増大、とくに莫大な貿易収支の還元

＊　地球規模の自然環境資源枯渇問題にたいする危ぐ

＊　国民の精神的余裕

2．西太平洋地域の水質環境問題

（途上国の水質環境問題はどの程度の重大さなのであろうか。）

＊　海洋汚濁の例：　南シナ海の汚染問題と国際協力（UNEP/Regional Seas Project）

＊　河川汚濁の例：　UNEP/GEMS，リンギ川（マレーシア）

＊　飲料水，公衆衛生問題：　WHO を中心に地球規模のとりくみ

3．開発途上国の湖沼環境問題の例

（途上国の湖沼環境に対する十分な理解は進んでいない。）

＊　バイ湖の汚染

＊　ビクトリア湖の汚染

4．開発途上国の水質環境問題の展望とわが国の果たし得る役割

（途上国の水質環境問題は今後どの様に展開するのか。また、われわれの果たし得る役割は何か。）

＊　途上国の急激な人口増大と内陸水資源問題

＊　国際摩擦と情報提供義務

＊　ILCE/UNCRD　プロジェクトの概要

5．国際協力とは

（途上国に協力するのか、途上国と協力するのか。）

1．開発途上国の環境問題に対する関心のたかまり

日本のＧＮＰ

100 兆円	昭和48年度
200	53
337	61

世界の一割国家
61年現在ソ連をぬき世界第２位

経済援助（ODA ）

1984年　　43億ドル（65億ドル）

アメリカ　87億ドル（1922年同水準へ）
フランス　38億ドル　をぬき第２位

経済協力の理念

外務省　「日本の総合的な安全保障を確保するための国際秩序構築のコスト」

1．経済大国のコスト
2．経済的対外依存に対するコスト
3．非西欧国家としての近代化の歴史をふまえる

世界的な環境問題

1973年	人口23億人
2000	60

５％経済成長率が必要
天然資源の需要は15年おきに倍増

アジア太平洋地域

土地の砂漠化：
毎年100 万平方ha（世界の16% ）
干ばつ，洪水，塩類化
焼畑人口は 2,900万人、2000年には 4,500万人
熱帯雨林：
３億６千万ha
2000年までに半減

国連環境特別委員会　東京宣言　（1987.2.27 ）

1．成長の回復
2．成長の質の変換
3．資源基盤の保全と強化
4．持続可能な人口水準の実現
5．技術の方向転換とリスク管理
6．政策決定における環境と経済の統合
7．国際経済関係の改革

2. 西太平洋地域の水質環境問題

水： 海洋，河川，湖沼

汚濁： 1.どこがどの程度汚濁しているのか
2.汚濁の原因は何か
3.どんな影響があるのか
4.どんな対応策をとっているのか

上記に総合的かつ明快に答えることはむずかしい

a.調査は個別におこなわれてきた。
総合的な状況把握は困難である。
GEMS(Global Environmental Monitoring System)
Regional Seas Programme
ASEP(Asean Environment Programme)
SASEP(South Asia Collaborative Environment Programme)
SPREP(South Pacific Regional Environment Programme)

b.国情があまりにも違うため一括して論じ得ない。

c.行政的対応はまだ遅れている。状況は流動的である。

南シナ海の汚濁問題

1980年　陸起源汚濁負荷の海洋流出解析（BOD ）

	負荷量 1000t/yr	生活系	工業系
マニラ	130	75%	25%
ジャカルタ	43	74	26
東ジャワ	130	58	42
ペナン	10	64	36
西マレーシア（西岸）	134	61	39
東マレーシア	31	66	34
バンコック	83	93	7
タイ湾岸	93	10	90

河川の汚濁

GEMSの報告	アジア全体のデータ収集
	都市河川のほとんどが著しい汚染
河川総合管理計画	ソウル・ハン川
河川環境総合解析	マレーシア・リンギ川

全般に汚濁の進行が著しい
局所的に著しい汚染
生活系汚濁負荷が比較的大きい
重金属汚染，有機系毒性物質汚染進行の強い兆候
汚濁防止策の欠如により解決のめどがたたない

3．途上国の湖沼環境問題

天然湖沼の水質汚濁について

	琵琶湖	ソンクラ湖	バイ湖
面積（ Km^2）	674	1,082	900
平均深（m）	44	1.4	2.8
集水域（ Km^2）	3,200	8,000	3,820
水温（℃）	6-27	29	25-30
ＰＨ	7- 8	7-8	7.5
DO（mg/l）	up to 9	6	7-9.5
COD （mg/l）	1- 2	1-2	5-33
TN（mg/l）	0.3	0.35-4.0（表面）	0.5-1.3
TP（mg/l）	C.005-0.02	0.02-0.15	0.2-0.4（Inorg）
漁獲量（ｔ）	3,246	?	120,000
集水域人口	1,160,000	1,200,000	2,380,000

＊ 問題は多岐にわたる。
＊ 集水域管理，特に社会，経済，文化問題と一体の問題である。
＊ 農業排水問題，土壌侵食，生活系排水問題などが中心。
＊ 貧困の問題と切り離して考えられない。
＊ 途上国の湖沼管理計画理念について幅のある、実際的なガイドラインとパイロットスタディ、ケーススタディの積み重ねが望まれる。

人工ダム湖の水質汚濁について

＊　モロッコ，Bou Regreg　水源地(Rabat，Atlas Mountains)
　　富栄養化による悪臭，飲料不適
　　住民が他の不良水源をもとめる健康リスク問題

＊　富栄養化した水を媒体した健康被害問題

　　蚊による健康被害
　　マラリア　清水あるいは濁水のみずたまり
　　デング熱
　　フィラリアによる疾病
　　Ｃｕｌｅｘ蚊による脳炎症（特に下水処理水ラグーン）

　　蝸を媒体とする健康被害
　　住血吸虫（とくにダム湖に発生するケースが多い）

　　藻類
　　cyanophytes を飼料として家畜が死亡したケースあり。
　　藻類の毒性により人間が死亡したケースは一般的でない。
　　悪臭，悪味によりさける。
　　Ｒのない月には解類を食べない（dinoflagellates)。
　　トリハロメタン問題

＊　その他無数の小規模貯水湖は富栄養化に悩んでいる。

　　巨大ダム湖（ボルタ湖，アスワンハイダム）も生態破壊が起こっている。
　　294 貯水湖のうち30%が富栄養化

４．開発途上国の水質環境問題の展望とわが国の果たしえる役割

途上国の急激な人口増大と内陸水資源問題

人口５百万以上の都市

1984年　34都市
2025年　93都市

ラテンアメリカ	10人中７人が都市住民
アジア	10人中３人が都市住民

インド	6,600 万人	から	１億８千万人	へ
インドネシア	3,500		１億３千万	
ナイジェリア	2,000		１億５千万	

表流水管理
停滞水塊管理
地下水管理

とくに人工湖沼（貯水池）管理問題

富栄養化
集水域化学物質管理
リスク管理

5．国際協力とは

経済援助の問題点

1.援助の理念

「78年の第１回日米援助政策企画協議以来、グローバルにみると米国の世界政策を補充する戦略援助の側面という要素が強まっている」（エコノミスト：86.4.14 ）

2.実施体制の強化

「日本の援助はＧＥ比率がひくく、円借款比率が高い上に、実質ひもつき（タイド）借款が大半を占める。貿易と援助の切り離しが国際的に求められながら、日本はビジネスの先兵として援助を利用してきた。」（同上）

途上国に協力するのか、途上国と協力するのか。

II. 問　題　提　起

1．途上国環境問題には発想の転換が必要

環境問題は、

1) 資源問題
2) 貧困問題
3) 多様かつ不安定

2．途上国の環境計画に対する配慮

1) Integrated economic environmental planning
(包括的レベルから展開)
2) 環境担当省庁の位置
3) 環境技術システムと社会経済システムの相互関係が直接的
4) 貧困の文化
5) 投資の優先度

3．公共システム分析

難点

1) 問題設定の自由度大きい
2) 既存のものの活用
3) 代替方策の発掘
4) 評価基準が多様

4．開発途上国の環境問題

1) 貧困による居住環境・衛生の問題
2) 工業化・都市化による環境汚染
3) 自然破壊

具体例

1) 環境衛生
　－都市域のスラム，不法居住集落における環境衛生設備が全く不充分
　－村落レベルでの環境衛生問題
2) 環境汚染
　－河川水質汚濁
　－大気汚染
　－有害廃棄物
3) 自然破壊
　－森林破壊
　－酸性雨

5．途上国環境問題をどうとらえるか

1) 国際経済環境との関連
　－経済政策による開発過程
　－法体系と運用とのギャップ

2) 途上国の内部構造との関連
　－Social Equity 概念希薄
　－政情の安定度合
　－社会的（民族，文化，宗教）多様性

文化・社会学的視点からみた
開発途上国の環境問題

講　師　：　村井　吉敬

昭和６３年３月４日（金）

講師略歴

生年月日：昭和18年８月20日

現　　職：上智大学外国語学部教授兼
　　アジア文化研究所所員

略　　歴：

1966年	早稲田大学政経学部卒業
1969年	同　修士課程修了
1975～1977年	インドネシア国立パジャジャラ大学留学
1978年	早稲田大学政経学部博士課程修了
1978年～	上智大学外国語学部

専　　門：東南アジア社会経済論

○西牧課長　それでは、時間が参りましたので初めさせていただきたいと思います。

環境の問題につきましては、ＪＩＣＡの方もこれまで全然やらなかったというわけではなくて、幾つかプロジェクトをつくったりあるいは研修員を受け入れたり、あるいは開発調査の中にも少し環境に配慮したようなものがあるのですが、全体としてＪＩＣＡのやっている仕事を見たときに、開発と環境という問題から見れば整合した形の考えがこれまでどうも欠けていたのではないかということで、我々の方としても環境の問題につきまして広くいろんな方々から御意見を聞きながらＪＩＣＡとしてある程度整合性のある考え方に持っていきたいなということを考えておるところです。

これまで、特に開発の方から見た環境問題について、橋本先生であるとかあるいは東海大学の友永先生であるとか、何人かの方からお話を伺ったのですが、きょうは特に環境の側から見た開発問題といったことで、上智大学の村井先生の方からお話を伺いたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○村井　私がこんなところではたして話す資格があるのかどうかわかりません。というのは私自身環境の問題を専門にやってきた人間ではないということです。私が専門にしているのは地域研究で、とりわけインドネシアを中心とした島しょ部東南アジアの社会経済というようなことをやってきております。もちろん環境問題と全く無関係できたわけではないのですけれども、細かい知識等について私が持ち合わせているものは大変に乏しいものでしかないと思います。

最近環境に関心を持ち始めたのは、最近やっている仕事を通じてでといえます。この数年私はエビの調査をやっております。エビといっても唐突にお聞こえになる方がいらっしゃると思いますけれども、日本人が今食べているエビのおよそ８７％ぐらい、が輸入エビで賄われている。その傾向はここ二、三年の円高でさらに拍車がかかってきているわけですけれども、なぜこんなにエビを私た

ちはたくさん食べるのかという非常に素朴な疑問からエビ研究は出発しました。エビは御存じのとおりアジアを中心にした熱帯でたくさんとれる。東南アジアからたくさん来ているということで、私の研究しているインドネシアもかなりエビの多産国でありますので、地域研究と絡めてエビ研究というようなものをやってみようということで何人かの小さなグループで５年ほど前にエビ研究会をというのを発足して、大体調査が終わった段階です。

そのエビを調べていく中で、特に海とか海岸部の問題、マングローブ林の問題に関心を強く持つようになったわけです。マングローブを私は知らなかったわけではなくて、２０年以上前に、石垣島とか西表島を旅行したときにもマングローブも見ております。どういうものかはおおよそは知っていたわけですけれども、マングローブが人間にとって何なのかというようなことは余り考えてこなかったわけです。ところが熱帯の海岸部、特に河口付近に密生したマングローブは、エビだけではなくてお魚全体にとって大変重要な地域である。エビは沖合いで産卵するわけですけれども、それがプランクトンになってだんだんに河口付近に泳いできて、稚エビの段階で海岸部に来る。マングローブ林は絶好の保護的環境をエビに与えており、エビはそこで育つ。しかもマングローブ林というのは熱帯の中では珍しく栄養に富んだ土である。熱帯というのは土壌自体非常に貧栄養だと言われていますけれども、マングローブ林はそういう意味でかなり養分があるということで、エビが育つ最適の場である。そんなことがわかってきたわけです。

ところがそのマングローブ林を今度は開発して、そこをエビの養殖池にしようという動きがここのところ急速に進んできております。特にインドネシア、フィリピン、タイでは、随分マングローブ林が刈り払われて養殖池がつくられているというのを目の当たりに見ました。これは実は非常に矛盾に満ちた開発行為なわけです。エビが育つ場所をつぶしてエビを育てる場所を人工的につく

るというおかしなことをやっているわけです。もちろん人工環境の中でエビを育てた方が大量に早く育つというメリットがもちろんあるわけです。それにつられて人間が欲得に目がくらんで養殖池がふえてくるということなのです。けれども、果たしてこれは将来的に長い目で見た場合に採算の合うことなのだろうか。そんな疑問を持つに至りました。

もう一つは、少々、夢物語に属する話です。この数年、私は東南アジア島しょ部、特に東部インドネシアのスラウェシからイリアン（ニューギニア西部）にかけてエビを調べながら随分歩きました。特にスラウェシはエビの養殖池の開発が進んでいます。イリアン近海もエビの大産地で、このあたりをかなり船に乗ったりしながら歩いてみました。そんな中で、東南アジアというのを海の側から見ると、今までの図式と随分違って見えるところが出てきたわけです。私はもともとジャワの稲作農村みたいなのに関心があって、そこを調べたりしていたのですけれども、ジャワの稲作農村というのは島しょ部東南アジアからすると非常に例外的なものではないか。もっと島しょ部東南アジアというのは違う経済なり自然環境のありようが普通であるということが歩きながらわかってきたわけです。

これまでは地域研究ということがしきりに言われてきていました。しかし、ある地域と別の地域とをもっと綿密に比較研究してみたらそれぞれの地域研究の欠点なり何なりというのが見えるのではないか。そのような問題意識で、京大の方々が中心になって地域間研究というのをこの間進めてきております。その地域で選ばれたのが島しょ部東南アジアとアフリカという全く比較のしようもないようなところなのですけれども、それをあえてやられました。その中心は京大東南アジア研究センターの高谷好一先生という生態学の先生です。先日、その地域間研究コロキアムが京都であり、私も出席しました。そこで高谷先生が冒頭に話題提供ということで話されたのは、大変大胆な仮説なのですけれど

も「東南アジアは森であり島であり海である」という仮説を提示された。今までの私たちの東南アジア観はどちらかというと稲作農村観というのが中心にあったのではないかと思う。つまりモンスーンアジアの稲作というとらえ方で、日本と似ているとか何とかという、そういう議論にすぐなってきたわけですけれども、島であり海であり森であるというとらえ方はそういう農村中心観というものとかなり違った様相を持っています。

東南アジアの自然は豊かだというようなことも一般的に言われます。たしかにインド亜大陸とかアフリカに比べると多分に緑が多いですし水が多いということで豊かに見えるかもしれない。しかし、実際森というようなことを考えてみますと、森というのは熱帯林にちょっと入ってみればわかるのですけれども、人に役立つようなものというのは余りないし、人が住みやすいようなところではない。高谷先生は駄洒落みたいな言葉で、表現されました。マレー語でオラン（ orang）というのは人という意味ですけれども、「森には人がおらん」というようなことまで言われました。もともと森の中には人が大変住みにくい。ですから人々が住んだのは海岸であり、またもっと極端に言えば海の上に住んでいた。海というのは熱帯の伝染病とか疫病とかというのが伝わりにくい、熱帯の中では比較的人間の居住しやすい地域である。東南アジアの島しょ部というのは人がもともと大変住みにくくて、生計の足しになるようなものは余りなかった。せいぜい人々は森の中にチョロチョロっと入って何かチョロチョロっととってきて、あるいは海の魚をとって、そんなことを生活のベースに置きながらもっぱら交易によって生きてきた。

交易というのは、近くの島とかあるいは遠くの地域と物のやりとりをすることです。歴史的にさかのぼればかなりさかのぼれると思いますけれども、たとえばメソポタミア文明が栄えるころから東南アジアの香料が伝わっていたとすらいわれる。香料諸島というとヨーロッパの大航海時代にしか我々は思いを寄

せないのですけれども、実はもっともっと昔から中国なりメソポタミアなりエジプトなりの文化の中に東南アジアの香料は入っていたともいわれます。東南アジア島海の島や森でとれ、あるいは海でとれるかなり特殊な産品をほかの人々と交易しながらかろうじて生きてきたのが東南アジアではないか。高谷仮説というのはこのような仮説なのですけれども、私はほぼ全面的に賛成です。私は東インドネシアの地域を歩きながらそういうことを感じていたわけです。

ただ、これはあくまでも東南アジアのプロトタイプみたいなものでして、それが今の時代に同じくそうかというとそうではないわけです。どんなに山奥であれ「僻地」の島に行っても工業製品はどんどん入っています。後でスライドでお見せしますけれどもフィリピンの一番南のスルー諸島のはての島にまで日本の古着が入っているような時代になってきているわけです。ですからそのプロトタイプはプロトタイプとして押さえておかなければいけないわけですけれども、そこからだけ現代の問題というのは考えられないということです。

東南アジアの開発なり発展の問題を考える場合に、一般的に言うと、工業化された国、第一世界といってもいいと思うのですけれども、第一世界の経験は第三世界に役立つはずであるという仮説があると思います。とりわけ純粋経済理論をやっている方々はそういうことを、つまり投資をすれば経済は成長するという単純な仮説があると思うのです。それは嘘だとは思いませんが、投資をすればそのまま工業化の段階にすんなりいくというふうにはどうもなっていない。第三世界の開発の問題というのはそう簡単ではないということは既に経験上知られてきたわけですけれども、最近のアジアＮＩＣＳなりＡＳＥＡＮの発展を見ていると、またぞろ昔の発展段階論というようなものが力を得ているように思います。筑波大の渡辺利夫さんが『成長のアジア、停滞のアジア』という本を二年ほど前に出されて、そこで彼は成長するＮＩＣＳと停滞する南アジア（バングラデシュなど）とを対比させています。しかし、ＡＳＥＡＮに関し

てはかなりあいまいな結論しか出していません。要するに成長する都市工業と停滞する農村みたいなことで、ＮＩＣＳと南アジアの中間みたいなところに東南アジアを位置づけていました。

島しょ部東南アジアの都市は確かにこの１０年ぐらいの流れを見てみますと、成長が著しい。都市の交通網の整備やビルのでき方を見ると大変成果を上げているように思います。ところがその同じ都市の中ですら、例えばジャカルタのタムリン通りという一番のメインストリートがありますけれども、そのタムリン通りをちょっと隔てた、２００メートルも奥に入った西側にタナアバンという土地がありますけれども、そこは昔ながらの民衆の生活地域で、相変わらずというか、もっとごったがえしているというか、すさまじい都市のしわ寄せがそこに集まっているという感じなのです。

成長ということをある都市の一部とか工業プロジェクトだけで見た場合に、かなり見落としが出てこざるを得ないわけです。その見落とされる部分が非常に局部的であれば何とか克服できるのかもしれないですけれども、むしろその見落とされている部分というか、あるいは成長のあおりを食っている部分というのは規模からいうとかなり大きくなっているのではないか。それは絶対貧困層とかいろんな定義の仕方はもちろんあると思いますけれども、しかもその正確な統計自体は非常に出しにくいわけですけれども、私の印象でいうとインドネシアは、もちろん人口増という基本的条件が一方にあるわけですけれども、成長は確かにあるけれども、成長より地域的、階層的マイナス成長というかもっとひどい状態が一方でかなり大規模に広がっているわけです。日本では「普通の人」はサラリーマンなのですけれども、フィリピンにしろインドネシアにしろ「普通の人」というのはサラリーマンどころか工場の労働者にもなれないのが普通の人であって、それは農村でわずかな土地を持っている人とかあるいは農村で全く土地を持たない農業労働者であるとか、あるいは都市のインフォ

ーマルセクターと呼ばれているような零細な第三次産業に属する人たちです。この人たちの比率が圧倒的に高いわけで、都市の労働者のうちのーこれも正確な統計がないので何ともいいようがありませんけれども、ある人が推計した数字によるとー６０％とか、７０％は第３次産業でも零細なその日暮らしの仕事に属している人であるといっているわけです。

こう考えてきますと、その日暮らしの「普通の人」たちを発展の問題の一番基本に据えるべきではないかと考えるわけです。従来の開発論というのはーいろいろな開発論がありますけれどもーどちらかというとショック・トリートメントというかビック・プッシュというか、都市に大企業、大工業を興せば、それはいずれは下にまでおりていくであろうという立場に立っている。均てん効果（トリックル・ダウン・エフェクト）をねらった開発効果論というのが横行しています。事実東南アジアなどのエコノミック・プランナーたちもそういうことを開発戦略として考えていると思います。にもかかわらず、現在東南アジアで起きている問題の最大の問題というのは失業の問題だと思うのです。大量の失業あるいは半失業の状態、これはほとんどの政府が手に負えないような状況にあります。そして一方では貧富の格差がある。第３番目に生態系の破壊問題がある。この３点を称して東南アジアの学者たちの一部には「開発の危機」（クライシス・オブ・デベロップメント）という言葉がかなり一般化しつつある。つまりこれまで２０年、３０年の開発というのは極端な言葉で言えば完全な失敗であったという、そういう評価すら出始めているわけです。

私は全部が失敗だったというふうにまでは思いません。つまり大衆の生活の多少のボトムアップはありました。例えば今まで裸足でいた人がゴムサンダルを履くようになったり、１年に２着しか服がなかった人が４着になったとかという、そういうボトムアップというのがあったと思います。この１０年、１５年の開発を見てみますと、大衆が少しは身ぎれいになったという効果があった。

ですから全部が全部否定されるようなものではもちろんなかったと思う。ただし、私が言った「開発の危機」の第３番目の生態系の破壊は我々が考える以上に深刻になる可能性がある。

第三世界というと、自然が人間を圧倒している。つまり未開発というふうに我々はどうも思いがちです。ところが実際は、第三世界は場合によっては第一世界以上の乱開発や、公害のたれ流しとがある。第一世界はそれなりの長い時間をかけて工業化をしてきている。日本でも周知のようにいろいろな公害を出し公害病を出しあるいは死者を出しながら、一方で少しずつではあるが、公害を避けることを学ぶプロセスみたいのがあった。ところが第三世界は、うっかりというか油断しているうちに自分たちは自然を開発することが大事だという立場に立って、極端な開発が一部で進んでしまう。それは熱帯の生態系というようなものを一方で無視するということもあります。都市の工業開発などを見ていますといわゆる公害規制みたいなことに対する法的措置も十分でない。場合によっては測定すらしていない。

数年前にジャカルタ湾で水俣病が発生したというかなりショッキングな新聞の報道の記事がありました。私は水俣病についてよく知っているわけではないのですけれども、ちょうどそのころジャカルタにおりまして、その報道をしている新聞記者にも何度も会ったりあるいはそれを告発したお医者さん－女医さんなのですけれども－にもお会いしたり、またジャカルタ湾を歩いたりしたこともあります。ジャカルタ湾に流れ込む工場排水というのはほとんど規制は何もないわけです。しかもその川沿いには千数百の工場があると言われているわけです。千数百の工場が全く規制なしに廃液をたれ流すような状態がある。熊本大学の原田先生という水俣病の権威の方が診断にわざわざ行かれて、水俣病に非常に酷似している患者さんがいると発表したわけです。

そのときに問題になったのは、データほとんどがないということでした。ジ

ャカルタ湾は重金属汚染がかなりひどいということは言われているわけですけれども、一体カドミウムなのか水銀なのかそのほかのものなのかという、そういうデータがほとんどなくて、しかもそれを継続的に観測する体制というのがインドネシアの中で残念ながら整っていないわけです。このこと1つとってみても、実は都市に関する限り非常にすさまじい野放しの開発が進んでしまってきている証明ではないかと思います。

同じような事例というか、これは結局確認できずに終わったのですけれども、中部ジャワにスマランという町がありますね。スマランの町で“奇病”が発生したという話を私はインドネシアのジャーナリストから聞きました。それは首が突然絞めつけられるみたいになって人がバタバタ倒れて何人か死んだという全く不確かな情報だけでした。そのことを確かめにいってみました。スマランの漁村まで行きましたが、結局それはどうもよくわからずじまいでした。国連関係の人が調査に来たり日本のお医者さんも行ったりしたらしいのですけれども、彼らも何の証拠もつかめなかったそうです。インドネシア語にアモックという言葉があります。アモックというのは集団的にトランス状態に陥る、何か霊が乗り移ってしまうような状況をいいます。それがある漁村を中心に起きた。その中で、苦しんで死んだ人がいる。そこの漁村の人はそういうふうに言っていました。果たしてこれが説明の仕方としていいのかどうかわかりません。しかしその漁村は河口のそばにあり、上流は大工業地帯なのです。そこから廃液が幾らでも出てきますし、村の中には食べたあとの貝殻が山のように積んでありました。村の人の説明の仕方は精神的な背景が原因のように言っていましたけれども、場合によっては工業排水による公害病かもしれないわけです。ジャワ海というのは泥海みたいなところで、浅瀬ですし、汚染が進み出すとかなりひどいことになるのではないか。

最初にお話ししたエビとも関係するのですけれども、エビはマングローブ地

帯の泥海みたいなところで育つわけですから、そこを養殖池にします。養殖池は淡水と海水を混ぜ合わせます。すると、そこには当然のことながら工業排水が海や河から入ってくる可能性があります。そこでエビが汚染される危険性があり、実際にそのことが起きたことがありました。もう１０年近く前なのですけれども、スマランの近くに日系化学工場があったのです。その化学工場はクエン酸石灰というのをサトウキビからつくっていた工場です。そこで出した廃液が田んぼと養殖池に入る。田んぼに入ると、これはアンモニア分が非常に強いということで過肥料状態になって、結局お米が実らない。池に入った部分についてはエビがみんな死んでしまうということで、住民たちは補償を求めて立ち上がったわけです。エビとお米だけではなくて、実は地下水にもそれがしみ込みまして、井戸水が物すごく臭くなって飲めなくなった。それで村の人たちは２キロ先の別の村まで水をくみに行くという状態になって、私が１９８４年に行ったときにもそれは続いていました。ところがその会社自体２年前に営業不振で撤退してしまいました。補償も解決しないままに終わった。

このこともそうなのですけれども、第三世界ではやはり公害ということ自体が非常に新しいことである。ところが一方では工場はどんどんふえる。もっと目に見えやすい形で言うと、自動車の排気ガス規制というようなものはほとんど行われていないわけです。今東京はだんだんにきれいな状況になっていますけれども、第三世界の都市に行くとこの排気ガスのひどさというのは、皆さんも恐らくお感じになっていると思いますけれどもかなりすさまじいところまで来てしまっているわけです。ですから、「開発の危機」というのをエコロジーの問題でとらえた場合に、我々の経験に基づき、またさらにはもっと先を読んだ対策というのを今から立てておく必要があるのではないかと思います。

ここから、少し各論的なお話を幾つかしたいと思います。マングローブ林とは別にいわゆる熱帯林というのがあります。今度こちらでおつくりになられる

映画もその熱帯林がかなり大きなテーマになっているとうかがっています。私は焼畑自体はよく知らない。というか物の本でしか読んだことがないのですけれども、焼畑というのはさっき言った「東南アジアは森である」といった場合の、森にとってかなり最適な農業の形態としてあったのではないかと思うわけです。現在の焼畑というのは熱帯林破壊の原凶みたいによく言われているのですけれども、それは、原型となる焼畑とはちょっと違うと思うのです。昔ながらの、例えばサラワクのイバンの人たちがずっとやってきた焼畑というのは、あるところを焼き払って１年なり２年トウモロコシやオカボをつくる。あるいはバナナをちょこっと植えて、そういうところで１～２年やって、次々に移っていっておよそ１５年なりというサイクルでもとに戻ってくる。もちろんそこは一次林でなくなるわけですけれども、ある程度自然のバランスを考えながら森に住んでいた少数民たちはそうやって生活してきたと思います。

ところが焼畑の様相がいわゆる開発なり、近代化によって変わってくる。下からの玉突き現象というのか、低地の農村で人口がだんだんふえてくる。もう一つはキャッシュクロップの導入、プランテーションなりエステートも含めてですけれども、要するに現金商品経済というようなものが低地から山奥に入ってくる。つまり人口増に伴う低地民の山奥への侵入がある。彼らは熱帯林の中での焼畑をシステムを知らない。ただ火をつけて肥料をつくるために一回限りの焼畑をやってしまう。タイなどではそういう形態が多かったのではないかと思います。商品作物の導入と低地からの玉突き焼畑によっていわば森のエコシステムというのがすっかり崩れてしまう。熱帯のエコシステムというのは非常に微妙なバランスの上に立っていると思います。それが一度崩れてしまうとやはり後は荒れ野原となる。茅みたいな草がぼうぼうに生えて後は使いものにならなくなってしまう。

もう一つは熱帯林の直接的な伐採という行為があるわけです。日本企業がフ

ィリピンでやり、インドネシアでやり、今マレーシアでやっており、やがてパプアに行くだろうという。かなり無責任なことをやってきたように思います。

実際に私はカリマンタンのある日本の会社の伐採現場を見せてもらったことがあるのですけれども、その会社の人はもちろんコンセッションの範囲でやって植林もやっていますよというようなことを言うわけです。けれども、その会社で働くインドネシア人たちにいろいろ話を聞くと、実はこの会社は２０年のコンセッションを得ながら木は１０年で刈り取ってしまって、コンセッションの区域の外にまで木を刈っているし植林なんかしているのは見たことないというような話をするわけです。これはもちろん日本の会社だけの問題ではなくて、これとつるんだインドネシアの軍人なり役人の側の問題もある。一番被害をこうむるのはそこに昔から住んでいた少数民、先住民が一番困っているわけです。

一度熱帯林が破壊されてしまいますと、今度は洪水の原因になるわけです。熱帯林の水の保全システムが全く失われてしまいますので雨季に大洪水が出て、乾季には大干ばつになる。カリマンタンで、これも６～７年前ですけれども世界最大の山火事というのがありました。あれはただの自然発火というよりもやはりバランスがどこかで崩れていったという結果ではないかと、全く素人考えですけれども私はそういうふうに思います。洪水と干ばつの繰り返しになりますと、今度は魚の資源にも影響が出てきます。今までじわじわとある程度栄養のある水が上流から来ていたのが一遍に洪水で来てしまって後は来ない。ですからマングローブ林自身が今度は貧栄養化していくわけです。エビだけの問題ではないでしょうけれども、熱帯林を保全することの意味というのは実は下流の農業なり下流の漁業なり、そういうものとも非常にかかわりがあるのではないかと私は思っております。　　マングローブ林と養殖池の話を先ほどちょっとしたのですけれども、最近造成される養殖池と昔ながらの養殖池というのの違いがあるようです。養殖池の起源というのは、いろんな本を読んでみたので

すけれどもどうもよくわからない。当てずっぽうの仮説を立てる以外にないのですけれども、多分私は塩田が起源ではないかと思っています。瀬戸内海式の塩田で、要するに満ち潮で来た海水をためる堰堤をつくります。田んぼのように下を平らにしておいて、海水を貯めておく。東南アジアの場合は乾季にそれをやり、太陽の熱でそれを乾燥させて塩をとる。塩は絶対的に人間に必要ですから、かなり昔からあったと思います。その池にたまたま稚エビなり、それからもっと大事なのはミルクフィッシュ（サバヒ）だと思いますが。その稚エビやサバヒが入ってきて塩田で成長してゆく。これはということでそれをヒントに養殖専門の池ができてきたのではないかと思います。ただし、塩田をつくるには田んぼをつくるようなかなりの土木技術が要ると思います。ですから、あるいは田んぼが先にあってそれが海岸部に及んだのか、塩田が先にあってそれが田んぼの技術にいったのか、そこら辺になると全くわかりません。

現在に至るまで、主としてサバヒを近くの住民たちに蛋白源として供給するものとしての伝統的な養殖池があります。今でもスラウェシの海辺を歩いていますと伝統的な池が圧倒的に多いわけです。それは大きな田んぼを海辺につくったようなものです。田んぼをつくって海からの水と川からの水とをうまく入れるような仕組みになっているわけです。それは全く管理をしてないわけではないですけれども、かなり粗放的な管理で、餌も何もやらずに自然に生えた藻で魚やエビが大きくなるという形をとっているわけです。そこにはエコロジーを生かそうというような知恵があるわけです。もちろんそこはもともとはマングローブ林だったわけですけれども、マングローブを一度刈り取ってまたそれを植林するようなことをする。土手にマングローブの木を植えるわけです。日中暑くなりますから、その日よけとしてそのマングローブの木陰ができるという工夫をこらしています。ですから伝統的養殖池は完全な生態系の破壊ではなくて生き物のサイクルをうまく考えながら、しかも植物の生態系もある程度そ

こに生かすというような池であるように思います。これも開発行為にはもちろん違いないわけですけれども、養殖漁民たちの知恵というのはそういう形で生かされてきた節があるのです。

ところが新しい養殖法というのはこれとは異っています。台湾が最も進んでおりますけれども、台湾の場合は完全にコンクリートのプールをつくるわけです。もとをたどると日本のクルマエビ養殖なのですけれども、コンクリートで完全に囲いまして池底に砂か泥を敷き詰める。海水はもちろん海から引きますけれども、淡水は台湾の場合川が近くにない場合がかなり多いので地下水をくみ上げてしまうわけです。稚エビも最近はほとんどがハッチェリー（人工孵化場）で孵化させた稚エビをそのまま持ってくる。フィリピンとかインドネシアの場合は稚エビ漁民というのがいて、海岸に泳いでくる稚エビを三角網でとって、それを池に売るというのが伝統的なやり方です。台湾の場合は、完全にそのハッチェリーで育った稚エビを池に売る業者がいるわけで、そのエビを大きくする。餌はほとんど１００％人工飼料です。これはフィッシュミールをベースにして、エビが食べやすいようにタコとかイカの臓物－これはエビが好きらしいのですけれども－を匂いとして使っています。ですからエビは物すごい高エネルギー商品になってしまいます。そういう形の一貫した工業的なエビ生産が進んでいる。

この台湾方式というのは恐らく東南アジアにこれから急速に波及していくと思うのです。生産力が非常に高いわけです。スラウェシの養殖池の１ヘクタール当りのエビの収量は１シーズンでせいぜい２００キロ、ところが台湾に行きますと１ヘクタールで１５トンぐらいいってしまうわけです。むちゃくちゃな格差がそこにある。ただ養殖の専門家に言わせると、今の東南アジアの粗放的養殖というのはそれなりにいいところもあると言います。台湾方式というのは、「金に目がくらんだ邪道」であるという人もいます。ただだれでも金に目がく

らみますから、それがこれから広がっていってしまう可能性はすごくあるわけです。その場合に心配なのは今まで長年やってきた養殖池の漁民たちが壊滅的な打撃を受けて失業してしまうということであります。それからもう一つは過剰生産になるのではないかという気がするのです。

もう既に日本ではエビがかなり値下がりしています。食傷気味かどうか知りませんけれども現在でも相当食べています。現在、日本人はアメリカ人の今３倍ぐらい食べています。これ以上になると給食にしょっ中エビが出るとか、そんなところまでいってしまうのではないかと思います。しかし、日本が買わなくなったらインドネシアでも、台湾でも大変に困ってしまう。現地でもっと出回ればもちろん問題ないわけですけれども、今の国際価格でいうと向こうの人は食べられないのです。まずよほどお金持ちが食べるぐらいしかないし、事実地方の魚市場なんか見ても高いエビというか、ブラックタイガーとかバナナと呼ばれているエビがありますけれども、そういう大きな型のエビはほとんど地方市場には出回りません。大体全部輸出されてしまいます。そういう意味で、高エネルギーを使って高蛋白というか良質蛋白を日本向けに供給するような産業構造というのは果たして東南アジアに合っているのだろうか。確かに外貨は稼げるあるいは一部の人は金持ちになるという構造はあると思うのですけれども、ただそれと普通の人たちの栄養の問題を考えたら一体どっちが大事だろうかということをもう少し考えていく必要があるのではないかと思います。　これとまったく同じことではないのですけれども、実はグリーン・レボリューションとエビの人工養殖というのは非常に似ているような気がしています。例えば業者の間では稚エビのことを種苗という呼び方をするわけです。つまり苗と考える。苗を植えて人工飼料をやってというのは、まさに肥料と農薬をやって人工の高収量品種の苗を速く育て大量に生産するという考え方と非常に似ているのです。養殖業というのは、ですから工業的農業に非常に近いものではない

かと考えるわけです。「緑の革命」が果たして本当にうまくいったのかどうかの評価というのは相変わらずわからないのですけれども、素人的に考えますと、あれだけ金をかける、つまり肥料、農薬にコストをかけイリゲーションにお金をかけ、それで収量が２倍になるぐらいは当たり前ではないかと素朴に思う。レボリューションというような問題とはちょっと違うのではないか。金をかければああいうふうに生産量がふえるということをただ言っているだけにすぎない。それでも米が自給できるということのメリットは当然あるわけで、昔ながらの農業をやっていたら恐らく東南アジアは今や飢餓人口が物すごくふえたと思う。あれだけ金をかけただけの効果というのはもちろん出た。にもかかわらず農村の中では、お金の農業が入ってくれば当然動揺が起きる。端的に言うと階級の亀裂というか、階層分化問題というのが非常にはっきり出てきている。「緑の革命」は技術的には中立であると言われてきました。小規模農民も等しく利益を受けるということが仮説としてあったわけです。しかし、小規模農民というのはある程度土地を持った農民ということでしかなかったわけで、小作人とか農業労働者ということはそこに入ってなかったように思う。ところが東南アジア、南アジアを見た場合、小作農民なり土地なし農民というのはとても多い。ジャワ島の場合、極端なケースでは、１つの村に６割ぐらいが土地なし農民が存在しているということがあるわけです。そうした場合にグリーン・レボリューションはいくら技術的に中立だといってみても、土地なし農民にはやはり大した効果は及ばない、むしろ新技術によって排除される。

これは私が実際に西ジャワの農村で稲刈り労働を観察した事例ですが、新高収量品種（ＩＲ米）が入ったところの村では鎌刈り労働－今までアニアニという小さなナイフで穂をつみ取るように刈っていたわけですけれども－が導入されていました。鎌なんていうのは大した技術革新ではないでしょうが、鎌が入ることによって労働効率は上がるけれども、労働の場から閉め出される農業労

働者が出てくる。実際に鎌刈りチームみたいなのを地主が組織しました。今までだれでも稲刈りのできるシステムがジャワにはありました。新品種導入にともなって地主は欲得に目がくらんで収量を少しでも大きくしようということになってくる。商品経済が本格的に入っていった場合にどこでもそうだと思いますけれども、それによってだれでも参加できた稲刈りは、特定の鎌を持った一団しか参加できなくなってしまう。これはトゥバサンと呼ばれているシステムなのですけれども、そういうシステムに移行していく。するとかろうじてそこでかつかつに生きていた農業労働者は就業の機会を奪われる。仕方なしに町に出ていくということになる。　このことは近代化であり開発であるから、そのしわ寄せがある程度出るのはやむを得ないということで、今までは近代化のコスト論として語られてきたと思います。やがてそのような不均等は解決するといわれてきました。しかし、そのコストは、どうも私たちが経験したよりはるかに大きな規模ではないかと思います。日本の工業化過程の中でも、農村でさまざまなしわ寄せがあり、飢餓もありました。戦争という大破局もあった。しかし戦後の工業化過程の中では、少なくとも都市工業部門はそれなりの雇用を準備していった。ところが今の第三世界は雇用を準備できない。それは最先端の工業が入ってきてしまうことにもよります。低賃金だから進出しようというような動機を日本の企業はもちろん持ってはいても、それだけが動機ではない。多国籍企業は根立して雇用創出力が弱い、そういう工業しかなくなってしまっていると思うのです。繊維産業にしても最先端の工場へ行けば、機械何百台に対してきわめて少数の人しかいないようなのが普通です。繊維であっても決して労働集約工業ではないわけです。農村の稲の鎌刈りなんていうのはそういう意味ではとるに足らない技術革新かもしれませんけれども、そのとるに足らない技術革新が実は物すごく大きな影響を与えてしまう。

例えば小型の耕うん機が入ってくる。タイなどではもうかなり入っているよ

うに思います。インドネシアのジャワではトラクターというのはまだそれほど一般的ではない。たとえわずかでも、トラクターが入ると何百人もの耕作労働を代替してしまう。ちょっとした機械がそれだけ大きな影響を与えるということ我々はかなり考慮に入れておく必要があると思う。もちろん都市の最先端工業というのを第三世界の指導層は望むし、新しい機械でなければ嫌だということも言われるわけです。しかし、トップ・エリートたちの中には、最近になって雇用志向工業化の委員性を認識する動きが出てきており、逆に失業の問題が深刻だということをどうやら気づき始めたと思います。

私がカンポン・テクノロジーというような言葉－これは私の造語なのですけれども－で言おうとしていることは、村落工業を起点にした雇用志向型のしかもエコロジーとの調和を保った適正技術というのか、そういうものをもう少し本気で考える必要があるのではないかということです。このカンポン・テクノロジーというのは決して整理された概念としていっているのではなく、ただの思いつきで言い始めているだけです。例えば日本は第三世界の中小企業の援助をするという方針が鈴木首相あたりから出てきました。しかし、中小企業ということで日本人がアジアの中小企業を考えると、やはりとんでもないことになると思うのです。つまり日本でいう中小企業といっても、中にはすごいハイテクを使ったり、機械化がきわめて進んでいるものが多い。しかしインドネシアの工業に関心があって随分調べたのですけれども、工業の中の８０％以上は村落工業で、あと中小を含めると九十何パーセントかが中小零細工業として分類されている。大企業というか大工業というのはほんの数パーセントしかないわけです。中規模といった場合でも、インドネシアの定義でいう中規模工業というのは２０人から１００人までの工場です。２０人から５人までが小工業で、５人以下が手工業というか村落工業というように分類されている。ですから圧倒的多数の工業というのは要するに小と零細である。２０人以下の、日本でい

えば工場ともいえないような作業場で季節労働者を雇い、あるいは家族労働者が主体にやっているのが工業の主体であると考えればいいと思います。それと外国から進出してきた企業との落差というのは想像できないほど大きいと思うのです。

ですから、裾野から先端までを埋めていく仕事があると思うのですけれども、これは容易ではないと思うのです。そんな簡単に埋められない。それよりも、今ある村落工業なり地場の小企業なりを起点にすべきではないか。これは決して格好よくないけれども実は一番周辺の住民にとっては役に立つ。決して高所得ではないにしても職を保証することになると思うのです。ところがその小零細企業と大企業あるいは外資企業との調和というのが果たしてできるのかというと、相当難しい。ほとんど絶望的にしか思えないのです。つまり小工業、零細工業というのはやがて没落する以外ないのではないかという悲観的な感じすら持つわけです。

ジャワの鍛冶屋さんを歩いて回ってみたのですけれども、その鍛冶屋さんの技術と日本の例えば三条の鍛冶屋との間にはまさに絶望的格差がある。三条で例えば国内向けの包丁をつくっている中企業を見せてもらいますと、ここでは大型の機械を１日じゅう使う。大型プレスで全部機械化されているようなとこが一般的です。これも鍛冶屋さんかもしれないけれども、ジャワの鍛冶屋さんはふいごはいまだに人力で木の筒みたいな二本のシリンダーで風を送って炭で火を起こして、鉄といえばレールの使わなくなったものとか自動車のスプリングの使い捨てとか、そういうものを使って本当に切れの悪いナイフとかパランといって山刀というのですか、ああいうものをつくったりしている。そこにもし三条の包丁なり刃物なりが入ってきたら、これはたちどころにつぶれるわけです。自由経済のために門戸開放したら、恐らくそういう産業というのはほとんどつぶれてしまいます。もっと零細な、例えばバナナの葉っぱでお弁当を包

むみたいな伝統的なやり方があって、これは大変僕はいいことだと思いますけれども、でもみんなプラスティックが安ければそっちに移ってしまう。結局この国の産業というのを一体どうしていこうかという高度な戦略がまずなければいけないので、外資を入れながらこっちも守ろうというようなことは恐らくできない。

日本の援助というようなことをもし考えた場合、その辺の難しさが僕はあると思うのです。零細企業を例えば日本が援助するといった場合、零細を援助できる日本の技術がそもそもあるかということです。昔ながらの鍛冶屋さんがいるかといったらほとんどいない。例えばお豆腐屋とか、テンペという大豆の発酵の食品がありますが、ああいうものをしようと思った場合にできると思うのです。日本にもお豆腐屋さんがいてできると思うのですけれども、ただそういう専門家が向こうに行くかという問題が今度出てくるだろう。それからちょっとした機械を持っていく。それでも問題が起きる。今まで石臼で大豆を引いていたのを機械化するというだけで、実はそこの地場の豆腐屋さんがバタバタ今度はつぶれてしまうというような問題がやはり起きてくると思うのです。だから雇用というようなことをもし中心に考えていった場合の援助なり協力の仕方というのは大変に難しい。

同じような問題で、僕は流通の問題がとても実は大事だと思っています。協力というと生産の問題が中心です。運輸とかコミュニケーションも援助の対象になりますけれども、そこには大した戦略があるようには思えません。例えばバザールと（市場）の機能というのは東南アジアの中ではきわめて大事です。インドネシアで考えられている市場の近代化というのはどういうことかといいますと、昔の市場の機能をある程度残してはいますけれども、建物を立派にして幾つか小さく区切ってそこにお店を入れるという発想で市場を近代化しようとするわけです。家賃も当然取る。ところがもともとの市場というのは、生産

者が勝手に来て、あるいは生産者から物を受け取った流通業者がてんびんを担いでバザールという場にあらわれて店を勝手に広げて、そこで物を売る。それがバザールだったと思いますけれども、市場の近代化はどうもみんな賃貸しの小さな店をつくるということのようなのです。そこでもやはり、人々の就業の機会が奪われているということがあるわけです。

ごちゃごちゃした汚い、魚の匂いや肉の匂いがする市場というのは考えようによってはよくないのかもしれませんけれども、いってみればそこが民衆の経済（ピープルズ・エコノミー）を成り立たせてきた。その民衆の経済を支えている現場というのがバザールだと思うのです。ところがそれをただきれいにすることによって、実は活気そのものを失わせてしまう。市場というのは本当に観察しているとおもしろい。自分でとってきたピーナツを焼きながら食っている人とか、自分の庭でとれたトマトを自分で食べながら売っている。市場で物売りを見ていますと自分の商品を食べながら売っている人が大変多いのですけれども、これは自給自足をその場で賄う、余ったら人に売るみたいな、そういう延長に市場なりバザールというのがあるようにみえる。しかもそこは社交の場である。東南アジアの場合、物を売る場合に女性が圧倒的に多いですけれども、女性はそこで社交をも兼ねるみたいなところがある。決してそれは秩序だったきれいな清潔な商品を売る場ではないけれども、人々の需要を満たす最低限のものはそこに行けば買えるしあるいは立ち食いもできるという場だった。それが何か近代化あるいは開発ということによって吹き飛んでしまう。

その極端な場合は、外資のスーパーマーケットを呼んでくるということです。これが市場であると今度は定義してしまう。ジャカルタやバンコックなりマニラでは、そういうスーパーマーケット化というのが一部で既に進められてきている。外食産業というようなものはもともとは露店で焼き鳥を売ったりしていたのが外食産業だったのが、ケンタッキーフライドチキンみたいなのが来る。

それはハイカラな洒落たこととエリートたちは思う。エリートの中のすべての人がそう思っているかどうかは別にしろ、多くの人はそう考えて、それによって流通なりあるいは運輸のシステムが全く変ってしまう、変えてしまう。要するに民衆の経済は汚いものである、おくれたものであるということによって破壊してしまうということが起きている。それをやった結果、実はますます都市の失業者がふえ、スラムがひどくなりということがあったと思うのです。

クアラルンプールでは屋台の物売りたちがたむろせる場所をわざわざ市当局が用意するというようなことをやりました。そういう“民衆の経済”の機能の委員性を近代化一辺倒だった政策者たちがやっと思いをいたすような状況になってきている。流通消費の場というのは我々は余り考えないのですけれども、流通消費の場というものは、最終的にとても大事な経済の場であって、そこを一体どうしていくのかということは実はどういう経済なりどういう見栄えの経済をつくろうかということと非常にかかわってくる。そこら辺も含めて、我々はオルターナティブを考えるべきであると思います。オルターナティブというのは、日本も含めてだと思います。日本がたどり着いた世界第１位か２位の一人当りＧＮＰの経済、この資源浪費型というか消費主義が極限まで高まった経済を東南アジアと対比しながら見ていった場合、それは一体何なのかという、その辺のことを考える必要がある。

最後に申し上げたいのは、私は昔がよかったとか村落共同体が手放しでいいとかそういうふうに思っているわけではありません。村の中にはさまざまな封建的なものがはびこり、あるいは差別があり搾取があり、矛盾大きな存在なわけです。それを温存して昔はよかった、この自給自足で自然を守るのがいいというふうには私は思っていないわけです。ただし、これまで第三世界が歩みあるいは歩もうとしてきた方策、つまり外国資本を入れ都市を工業化し、その均てん効果が村にも及ぶはずだという発想の経済開発というのはもはや力を失い

つつある。それにかわって、やはり民衆という、つまり８０％、９０％の普通の人たちが生き生きと生きられる－やや文学的表現ですけれども－その人たちがまっとうに生きられる経済をどうやってつくっていくのか、そこで私たちの役割というのは果たしてどんなところにあるのかということを考える必要があるのではないかと思っております。

長く話してしまいましたけれども、スライドを８０枚か９０枚ぐらい大急ぎで見ていただこうと思います。（スライド映写）

Ｓ）これはアラフラ海、ニューギニアのすぐ南なのですが、アル諸島という小さな島の集まりですけれども、そこの小宇宙みたいなカンポンです。ヤシの木が生えて家の大きさは村じゅう大体同じみたいな大きさで、教会かモスクがどこかにあるというところです。

Ｓ）人びとは海沿いにへばりついて住んでいる。森の中にはまず住んでいません。ですから人々の移動は道ではなくてカヌーでやっています。

Ｓ）これはスルー諸島の一番南のシタンカイという、漂海民（シージプシー）とか、バジョウと呼ばれたり、サマと呼ばれたりする人たちで東南アジア一帯に分布していますけれども、海の上にこういう橋をつくって家と家を行き来する。

Ｓ）この辺の人たちはナマコをとっております。今このおばさんがとっているのはナマコなのですけれども、ナマコをとって乾燥させて中国に輸出する。あとアガール・アガールというテングサに似た海藻を海からとったりします。

Ｓ）これはインドネシアのやはり同じバジョウの人たちで、ここは珊瑚礁を積んで家をちゃんとつくっています。

Ｓ）これは先ほどのシタンカイですけれども、全く海上都市みたいなところなのです。今沖でとってきたお魚とかエビとかウニとかを売っています。ここは珍しくナマコを生で食べていました。

Ｓ）これはナマコを裂いて腹ワタを取り出しているところなのですけれども、これはさっきのシタンカイからさらに２キロぐらい離れたところで、海の上に家が何軒か建っています。

Ｓ）カバヤキみたいにして、ナマコを言わば薫製にするのです。薪木はマングローブを使っています。

Ｓ）このナマコ貿易というのは実は歴史的にかなり古いもので、昔スラウェシからわざわざオーストラリアの北海岸のアーネムランドあたりまで船でとりに行っていたこともあります。白人の建国２００年というのは実はちゃんちゃらおかしいわけで、インドネシアの人たちはそれよりはるか以前からオーストラリアには行ったり来たりして、アボリジニもこの労働に加わっていたわけです。

Ｓ）アボリジニとスラウェシの人との交流をオーストラリア建国２００年祭の目玉にしようと考えたオーストラリア人がいました。ナマコの貿易を通じての交流を記念しようというので、ナマコ船がたしかウジュンパンダンからダーウィンまで行ったはずです。真ん中のがピーター・スピレットという白人のナマコ学者というかナマコの歴史ばかり研究している人です。

Ｓ）オーストラリアの北海岸に行きますと、タマリンドの木が沢山あります。もともとタマリンドはオーストラリリアにない木だったのをインドネシア人がタマリンドを調味料として持ってきたらしくて、それが自生して海岸に生えています。

Ｓ）これは恐らく世界唯一といっていいのでしょう。ナマコ・レストランというのがダーウィンの町外れにあります。バグース・レストランというレストランで中国系インドネシア人が経営して、店の屋根の上にナマコの張りぼてみたいなのがあります。

Ｓ）これがそのレストランのおやじなのですけれども、手に持っているのはマイクロホンにナマコをかぶせてあるものです。

S）ちょっときょうはお話しできなかったのですけれども、少数民族の問題というか、これもとても大事だと思うのです。やはり少数民というのは開発からいつも疎外されるか無視されているのですけれども、これは中国の雲南省のタイの人たちのお坊さん、見習い小僧みたいなのです。

S）東南アジアは少数民がとても多いわけで、これも雲南省のタイ族の人たちです。ここではタイ語がほとんど彼らのコミュニケーションの言葉になって、漢語をわかる人というのはエリートなわけです。

S）また話題が全然変わりますけれども、森の産物です。これはチョウジを干しているところなのです。これはアンボン島ですけれども、もともと香料諸島だったところです。

S）森の産物を幾つか御紹介します。これはサゴヤシからとったサゴ澱粉をケーキにしたものです。もともとこのアンボンとかマルク諸島というのはサゴヤシが主食だったわけです。僕は余りおいしいものだと思いませんけれども、それでもサゴの生産力はそれなりにあるわけです。これはかんでも砂みたいで全く味けのないものです。

S）これはナッツメッグの実になるわけで、これは皮をむいて皮も使いますし、種の方も使うわけです。ナッツメッグとチョウジがまさに香料諸島の中心交易品です。

S）これはセラム島といってアンボンの向かいの割と大きい島です。セラム島の山の中で会った人なのですけれども、槍なんか持っています。ダマールという松やにみたいな樹脂の採取に行く。これも交易品として昔からよく採取されていた。一家挙げて山の中に入るその途中の姿です。

S）これは籐です。籐椅子とかああいうのをつくる籐を山からとってきたところで、これもセラム島です。

S）これはナマコを干しているところです。茶色いのも黒いのもそうですけれ

ども、余り大きいものではなくて、これは恐らく値段は大してよくないと思います。

S）これはアガール・アガールと呼ばれるテングサに近い、日本語で何というのかわかりませんけれども、これは寒天にももちろんなりますけれども、歯磨きの中に入っていたりコンビーフのビロビロしたところとかかなり用途があって、フィリピンからヨーロッパ中心に輸出されているそうです。

S）これは熱帯林の開発の林道に当たるわけで、一度これができてしまうと、回りの木がどんどんなくなっていくという例で、セラム島です。

S）大きな合板工場があって、韓国系の会社が技術提携でやっており、日本人の技術者もいました。かなりすさまじい破壊がここでは進んでいます。

S）これが養殖池です。上空から見るとこんな形になって、周りに植わっているのがマングローブです。

S）これもそうです。川がずっと蛇行して流れているのも見えると思います。

S）マングローブ林の中を歩いてみたのですけれども大変歩きにくいところでした。

S）それからマングローブは炭にしたりこうしてまきで使われたりします。ですから伐採も相当行われています。

S）これはエビのトロール船です。その船に乗せてもらったのですけれども、エビのトロール船というのは、問題はエビだけがとれるのではなくてありとあらゆる魚やなんかが入ってきて、エビ以外はほとんど海に捨ててしまうという資源のむだの問題があるわけです。

S）養殖池にまた戻りますけれども、伝統的養殖池はいろんなお魚が入ってきてしまうわけです。ミルクフィッシュ（サバヒ）とエビ以外にも、例えばテラピアという、日本でイズミダイと呼ばれているのが結構入ってくる。それは釣ってもよいという村のおきてがあるらしくて、それを釣りに来たおばさんです。

それだけが釣れるとも思えないのですけれども。

S）これが池で育ったブラックタイガーです。全部日本向けです。これはスラウェシです。

S）エビのもともとの用途というか、エビも随分いろいろ向こうでは使われていて、これはタラシと呼ばれている固形の調味料に当たるものですけれども、エビの肉と塩とをまぶして臼で突いて固めたもので、発酵しますから一種異様な匂いがしますけれどもジャワなんかでは結構大事な調味料です。

S）これは台湾の養殖池で、今池を干して新しく砂を敷いているところだと思います。

S）これはエビの冷凍工場で、これはカリマンタンの工場で日系の企業です。

S）これもそうです。

S）最終的にはこんな形の製品になって、我々がスーパーで買うときはこれをまた氷を溶かして売っていますからこんな形では余りお目にかかりませんけれども。

S）これはスラウェシの水田で、すごくきれいな棚田だったところです。

S）これは草刈りの場面です。稲を植えてから何日かしての草刈り、全く手でやっています。これは西ジャワの農村風景です。

S）これは水牛を使った鍬の労働です。

S）これは田植えの風景で、苗代のところです。

S）これは稲刈りで、これはスラウェシの山奥のトラジャというところで、ここはまだアニアニを使って穂をつみ取るような刈り方をしていました。品種も高収量品種ではない。

S）これはジャワの稲刈りで、ごらんのように物すごいたくさんの人が集中して来るわけです。農業労働者のおばさんたちといってもいいのですけれども、だれでも刈り取ってよくて、刈り取った分の１０分の１が賃金であるというお

きてがあります。

S）これは脱穀です。板で脱穀しているわけですけれども、バリ島の風景です。ここも全く機械化がまだされていませんでした。

S）刈り取った稲をこれから恐らく地主の家か何かにこうやって運んでいくところで、これはトラジャの風景です。

S）これは織物で、衣食住というようなことを考えてみたいのですけれども、スラウェシの近くにワンギワンギというちっぽけな島があるのですけれども、これは全くの手織りでしかもそめも草木ぞめです。

S）これはスラウェシでシルクのサロンを織っているところ。

S）これはジャワのバティックろうけつに当たるものです。これも全く手作業です。

S）少し機械化した工場です。これはバンドンの南の方にマジャラヤという繊維で有名な町があったのですけれども、これは７～８年前に撮ったものですけれども、まだ手織りのものがありました。恐らく今はもうなくなっているのではないか。

S）これは村のお豆腐工場で、池の前でお豆腐をつくって池中に豆腐かすを流し込んだりして、そこでお魚が育つみたいな、自然循環。

S）ジャワのお豆腐はかた目のお豆腐で、大体油で揚げて食べます。

S）これはテンペのむろ、発酵させているところで、納豆を固形にしたというと変なのですけれども、そういう食べ物で大変ポピュラーな食べ物です。

S）これは村の鍛冶屋さんに当たるもので、ふいごで今風を送って炭の火を起こしているところです。

S）子供みたいな人が働いています。手前が親方に当たる人です。

S）これはバリ島の鍛冶屋さんで、日本は鍛冶屋で女なんてまずいないと思いますけれども、これはお母ちゃんとおじいちゃんという感じなのですけれども、

鍛冶場でこんなことをやっていました。

S）さっき船をちょっとお見せしたのですけれども、船の歴史というのは非常に古い。これはボロブドュールのレリーフに出ている、ですから８世紀ぐらいからこういうかなり大きな船がこの辺では使われていたと思われるわけです。

S）これはスラウェシの造船所というか浜の造船所みたいなものです。木造の大きな船を今でも釘を使わずに設計図もなしにつくっているわけです。

S）これもその船の建設をしているところです。

S）でき上がるとこんな感じの、場合によると３００トン、５００トンの木造船までつくります。これはピニシと呼ばれる有名な型の船です。

S）さらに小さな漁船では、こういうちっぽけなダブル・アウトリガーの船もあります。これは物すごくきれいな型の船ですけれども、これもスラウェシです。

S）乗り物の話はしなかったのですけれども、実はベチャという三輪の輪タクが今町からどんどん追放されています。重労働だから大変は大変なのですけれども、田舎から来た人にとってはかなり大事な職だったわけです。

S）ところが、それがだんだん町の都市交通の発達で追い出されて、こうやってベチャの捨て場みたいな、不法営業をしているとどんどん取り締まられてこういうところへ捨てられてしまうわけです。

S）バザールに類する市場で、市場の前の通りも利用した市場なわけです。これはジャワのジョクジャカルタの町です。

S）これは屋台です。何の店かわかりません。

S）これはてんびんで、恐らく廃品回収か何かして木の灰を洗剤として、一種のちり紙交換みたいなものですけれども、そういう商売です。

S）これはジャムという生薬なのですけれども、生薬の飲み薬を売り歩いている女性で、手に持っているお魚は近くの市場で自分が買ったものですけれども、

後ろに背負っているビンを一杯何十円とかで売っている人で、ジャワの女性がこれを全国津々浦々の販売網みたいなのがあって、どこに行ってもこのジャム売りというのがいます。

S）これはマレーシアのコタバルか何かの市場だと思います。市場の外にこうやってお店を広げてしまうという感じです。

S）これは日本の古着がスルー諸島のタウィタウィという小さな島で売られている風景です。

S）日本名の何とかちゃんという子が着ていたであろう名札つきの洋服まで売っています。１枚１００円ぐらいでしたか、すごく安いのです。

S）ショッピングプラザが一方でこうやって大都市にどんどんできてきています。これはジャカルタのクバヨランバルというところのラトゥプラザというショッピングセンターですけれども、全くバザールとかけ離れたようなものが一方ではどんどんでき始めている。

S）これはシンガポールのオーチャードローですか、ここは極限までいっていると思います。

S）日本の商品が一方ではどんどん入ってくるわけです。

S）これは味の素、バス停の屋根です。

S）これはジャカルタの町です。

S）ですけれども、一方で、これはジャカルタのちょっと北の方のパサルイカンという漁港がありますけれども、その近くのスラムです。こういうスラムというのは何か雨後のたけのこのようにどんどん出てきてしまう。

S）これはバンコクの市内です。

S）これは最後で、スルー諸島の漂海民のモスクです。以上です。

〔質疑応答〕

○須藤　どうもありがとうございました。

あと残り２０分ぐらいなのですけれども、今の先生のお話を伺いましていつものように質疑応答に入りたいと思います。よろしくお願いいたします。

○今井　先生の最初の焼畑のお話、それからマングローブのお話を聞いていまして、実は日本の昔の話をちょっと思い出していました。どういうことかというと、１つは日本の森林の造林のやり方のことです。江戸時代は針葉樹と広葉樹を組み合わせて植林してました。どういうことかというと広葉樹は根を深く張るのでそれを利用し、根の浅い針葉樹を保護するというやり方です。それから、川の利用の仕方では、自然の氾濫源は適当なものを植えて、氾濫すればそこはそこで水が引けばまた使う。だから川にはここ以上には人は手を入れてはいけないとか、そういう川の使い方の知恵があったわけです。それは村の、書かれてはいないけれども決まりだったわけです。それから日本の農地の問題でも、有機農法というのは昔から日本でずってやってきています。今言ったようなことは全部日本人がその後、技術を適用する際に全部忘れてしまって今大きな問題になっているわけなのです。何か先生の今のお話を聞いたら、日本に関係のない話ではなくて実は日本でも同じような経験をしている問題なのですね。

例えば日本の農業の土地の生産性の問題では、去年ですか農林白書で日本の農地は疲弊しているというのを初めて書きました。農林省があいう正式の役所の文章で書くというのは大変な話だと思うのです。河川行政の方にしても、また水の使い方ということでかなりいろんな反省も出ているようですし、林業の方は、先ほどは木の植え方の問題でしたけれども、それだけでなくて日本の林業の管理の問題、あと２０年したらだれも管理する者がいなくなってしまい森林行政の根幹が崩れてしまう。というような話もちょっと聞いたことがあります。今東南アジアで起こっているということで先生が言われたのは、実は我々と無縁ではなくて我々も同じような問題に直面している、そういう共通性も

あるのではないかという感じを持ちました。

その次に、質問も交えてなのですけれども、先ほどの工場の規制とか自動車排ガスの件なのです。インドネシアでもフィリピンでもタイでも、規制はあるのです。書いたものは。それはやりたくないのではなくて、人材や機器不足でやれないという面もやはりあるのではないかと思うのです。この点は、恐らく日本のこれからの環境分野の技術協力の非常に重要な分野になるのではないかと思います。あと、今から１０年ぐらい前にイースト・ウェスト・センターで会議をやったときにちょうどマレーシアの環境の担当をしていた中堅ぐらいの方が来られて、僕が質問したのです。何であなたの国は排ガス対策車を輸入しないのだと言ったら、答えは簡明なのです。排ガス対策車の方が高いというのです。しかし、恐らくあと１０年もすればだんだん排ガス対策をした車が入っていくのではないか。ただそのときに、やはり大きな問題になると思いますのはメンテナンスというか車検の問題です。今の途上国は車検はほとんどありません。ですから２０年使った車なんかはざらにあります。あんなところに排ガス対策車を持っていったら１年ももたないですよ。全部触媒はすぐ悪くなりますし。そうしますと排ガス対策車を持っていくというのは解決ではなくて、それがちゃんと排ガス対策車として機能するようなインフラが必要だと思う。やはりそこら辺も一緒に、先ほど先生が将来のことを考えながらとおっしゃっていましたけれども、公害対策をやる場合には周辺のインフラ整備、人づくり、施設づくりあるいは測定体制づくり、そういうのをうまく一緒に考えてやっていかなければいけないのではないかという感じを持ちました。

○城殿　先生のお話を伺って全体を通して感じられることは、第三世界では、ごく一部の政策担当者がその国の全体の将来みたいなものを握っている現状があること、そして国民の生活の質を上げるためにいろいろと国内ではなかなか得られない部分をほかの先進諸国とかあるいは国際機関などの援助から得よう

としていろんなプログラムが組まれているわけですけれども、必ずしもそれが一般の国民の生活の向上に役立ってないことです。そういう状況の中で、私たちＪＩＣＡ関係者が関与する官ベースの協力は、先生がおっしゃられた大多数の普通の人たちに恩恵があるような形でなされるにはどうしたらいいかというのは、非常に重要な課題であるのですが、私自身の気持ちとしてはこれはきわめて難しいと感じております。また、第三世界では国内的にも歴然とした格差、階級とかあるいはいろいろな経済的な上でも格差がますます広がっている。その勢いが加速度的に広がっているというような状況を見ると、取り組むべき問題はわかっているのだけれどもなかなか対応の仕方が見い出せないという、私自身常に感じていることなのですけれども、非常にジレンマというか不消化状態が自分の中にある。気持ちの上ではそういうことはわかっていても、では具体的にというとどうも的確な回答が思いあたらないわけです。

たまたま我々は、今“開発と環境”の問題にかかわっていて、これから本格的に作業を進めていくわけなのですけれども、作業を進めていけば進めていくほどさきほど申しあげたような不消化状態というのがもっと強くなるのではないかと私自身感じているのです。ですから正直言ってどこから手をつけていいかわからないのですけれども、ただ問題意識としては非常に先生のお話を通じて相当根深いものがあるなと再確認したわけです。ですから我々としてはやれるところからやるしかないのではないかと非常に根本的な問題の解決にはならないとは思うのですけれども、日本と開発途上国とのかかわりの中で改められるようなものがあれば、小さなものでもそこからやっていくしかないなと思うのです。

○村井　どうなのですかね。例えば住民が自分たちの周辺でこうして欲しいというような意見というのがあると思うのです。それは村の人たちと話していると自分たちの要求はあるわけです。例えばイノシシが出るから金網を張って欲

しいとか、すごく即物的な要求は幾らでもあると思うのです。ところが例えばインドネシアでいうとバペナスという経済企画庁にあたるお役人は、何々村はイノシシで困っているなどということは知らないわけで、すごく一般化した問題としてとらえると思うのです。やはり米の収量はまだ足りないから肥料をもっと使う農業にした方がいいというようなそういうところで。そうするとやはりこの間のギャップを一体どうするのかという、それは官と民という問題だけではなく、歴史的に階級がつくられてしまった過程もあるだろうし、民主主義などという言葉でいってしまうと余りに月並みですけれども、住民が決定に加わるようなシステムがうまく機能しないという問題もある。それが実は一番難しいわけで、トップの人はそれなりの既得の権益なり場合によったら経済的利権まで持った集団として存在しているわけですから、何々村にイノシシの網を張るよりはコンセッションを売って林道をつくってもらって金もうけした方がいいと個人的におそらく考えるだろう。また集団の利益としても考えてしまうようなところがあると思う。ですから援助をする側が立ち入れない問題として、そこら辺がイライラする原因にもなるのだと思うのですけれども、そこまで立ち入ってしまうと今度はこちら側は一体何なのかみたいなところになってしまう。つまりお前らの政治体制が悪いということを果たして我々は言えるのか。そしてそれに援助したがる日本の側もどこかにあったりするわけです。そのあたりが何かドロドロして何とも言えないような感じです。

○城殿　ましてや第３世界の政策担当者の方というのは、大部分が先進国、たとえばヨーロッパとかアメリカ、一部分は日本みたいなところである程度いろいろな形の政策レベルのことを身につけながら、先進国の考えを持って自分の国に帰って政策担当するわけですから、やはりそのアプローチの仕方としては先進国志向になっていると思うのです。それと国内に伝統的にあるものとのやり方という非常な遊離感の中で国の開発問題と取り組んでいくということにな

ると、どうしてもその国が本来こうあるべき姿というのがなかなか反映しにくいような形で開発されやすいと思うのです。

○今井　そうですね。１つ先ほど国内企業と外資企業との問題をちょっと先生が対比されて言われましたけれども、やはりいろいろな視点の高さがあると思うのです。国全体として強い国になりたい、もっと開発したい、成長した国になりたいという視点で物を考えるグループ、あるいはそういうレベルでの政策判断をしなくてはいけないという要請も多分あると思うのです。もうちょっと下がって県レベル、そこでその県をどうするか、それは例えば中央と非常に利害が反したり、あるいは中央から非常に強い力で抑えつけられたりそういうのもあるでしょうし、それからもっと下がってくると町とか村、それが自立存続していくために何をしたらいいのだという視点が必要だと思うのです。

日本などの場合には、例えば公害の問題でちょっと申し上げますと、１つ保健所というシステムがまず村のレベルであったのです。そこが最初に公害問題に手をつけた。そこに住民が苦情を言う。そこが調べに行き、そこで皆が勉強してこれはどこかおかしい。それを今度は市なりが吸い上げる、そして市が県に陳情に行く。県は最初は耳を傾けないけれども、そのうち大変な問題になってしまって傾けざるを得ない。そういうことで今度は国が ― そこから国までまた随分時間がかかるのですけれども、国は水俣でも何でもずっと無視していたわけですけれども、最後になって公害国会で佐藤首相が決断してこれはやらざるを得ないということでやっと国までいったのです。ですから日本の公害行政の原点というのは保健所なり村、町のレベルにある。そもそも公害問題というのはそういう意味では地域的な問題だと思うのです。全国一律の公害問題というのはあり得ないと思うのです。

これは多分日本の１つの経験だったのではないかと思うのです。ではそういうシステムが途上国にあるかというと、そこが非常にないと思うのです。です

から先ほど言った特に国レベルで物事を判断する。国レベルで政策をやろう。ではラボでもつくろうか。もうメキシコでもブラシルでもつくっています。しかしながらもう少し視点を下げて村レベルの問題でどういうふうにとらえたらいいかというと、もう中央との関係が全くない。そこでの村が抱えている問題がなかなか国全体が抱える問題の中で解決されていかない。そこが何か物すごく大変だなという感じがしてならないのです。

○城殿　いろいろなレベルの要請が均等に上がってくればいいけれども、どうしても国政担当者の意向が２国間の援助の中で反映されてしまいやすい、そういう限界があると思うのです。ボトムアップな要請が上がってくればいいけれども、なかなかスンナリ上がってこない。

○村井　ＮＧＯの問題がしきりに最近議論されています。ＮＧＯの援助の方がいいのだということを言う人もいますけれども、僕はＮＧＯだからいいなどということは単純に言えることでないと思います。ただにもかかわらずＮＧＯへのチャンネルは余りめんつにこだわらずに確保するというところを少し考えてみる必要があると思うのです。特にこれはまた宗教的な問題も絡んでくると思うのですけれども、例えばイスラムのネットワークで農村開発があるとか、キリスト教団体が農村開発をやるとかという、そういう活動というのはかなり国際的にもネットワークがあり経験があり、そして情報も世界規模でめぐっているようなところがあると思うのです。そうすると、そこである程度の経験を積んでヨーロッパならヨーロッパの国から援助を受けているＮＧＯというのは当然あるわけです。そこにまた日本の援助が集中して援助競争みたいになるというのも問題がありますけれども、何かその辺を若干弾力的に考えて、相手はただ２国間援助だから政府だけがということよりも、例えば県とか地方自治体、ＮＧＯを含んだ形で、最初は情報を集めるぐらいでもいいと思うのてすけれども、例えば環境問題なら環境問題でこの町の環境問題という場合にやはりその

町の行政当局とコンタクトする。その場合相手政府がかなり絡んでくるー絡んでくると言ってはいけないけれども、介入することはあり得ると思うのです。

例えばインドネシア政府の場合外国のミッションが援助しようという場合も全部宗教省経由でないとやらせないというようなことを言っていますから、国によっては難しいこともあるかもしれない。しかし、ヨーロッパ、アメリカの経験というのは随分積まれてきているように思うのです。ですからちょっと情報を集めるだけでも大分視野が違って見えてくるのではないか。日本のＮＧＯに出すというよりむしろヨーロッパのＮＧＯがいい活動をインドでやっていたという場合には、そのヨーロッパのＮＧＯに出すみたいな、そういうことをも考えてもいいのではないかという気がするのですけれども。その援助のルートの多角化ということによって、ただ政府対政府ということからくる弊害が少しは避けられるのではないかという気もしますけれども。

○西牧課長　そうですね。政府開発援助のやることというのは限界がありますから、結局は草の根レベルとかそういうことになればやはりＮＧＯに頼らざるを得ないし、ＮＧＯとうまくやっていかなくてはならないですけれども、今度はＮＧＯの側からすれば政府から金をもらってくればＮＧＯでなくなるという問題がありましょうし、ヨーロッパの場合は宗教とかそういう長い伝統がありますが、日本のＮＧＯのはなかなかそのあたり難しい問題があります。とりわけこれは、そういう言い方が適切かどうか知りませんがやはり非常におもしろそうなところ、非常にマスコミ受けするようなところにしかＮＧＯの人がなかなか行かないですね。日本のＮＧＯ自体が少ないということもあるのかもしれませんが、さっき先生がおっしゃったようなごくごく普通の村で、イノシシが出るから網を張ってやってくれというふうなところにはいかないですね。もっと厳しいもっと極端な、もうこれでもかという、地獄を見つけて行くということを中田先生が言っていましたけれどもー特にＪＶＣとかああいうことになっ

てくると－やはりその辺まだまだ日本の援助の歴史が少ないということがあるかもしれませんけれども、ごく普通の民、ごく普通の一般人へ援助が行き届くようなところに日本のＮＧＯも多分まだいっていないのではないかという気がするのです。

ですから私は、援助しようというもう一つ前にさっきおっしゃったようにただ見るだけ、モニタリングするだけというようなことで、例えば日本の大学院の学生なんかを、例えば先生のところの学生さんをどこか田舎にホイホイと放り込んでやる。それを我々の言葉で言えばジュニア・エキスパートのような形で少し旅費とか面倒を見てやるということで、どこでもいいからごく平和な村に行ってそこで何が起こるのか見てきなさいというふうなことなんかの方がかえって実施できないかと思うのですのですけれども、今度はしかし研究ということになると昔と違ってさっきおっしゃったように非常にそれぞれの国が見張っています、その村で何しているのだというふうなことになって。ですから、そうすると難しいことだらけでしゃべっているのが疲れてきますけれども、ただ確かに政府開発援助は限界がある。それとＮＧＯとの結びつきを何か少しずつ考えなければいけないのです。我々の方も少しは、ＮＧＯの人に対する語学の研修だとかそういうのをここで最近やっていますが、もう少しそういったことでつながりを持っていくのだろうなと思いますが。

○今井　前ロンドンでＩＩＥＤという国際ＮＧＯの持続可能な開発に関する会議がありました。いろいろＮＧＯの人がいっぱい出ていたのですけれども、大体共通して出てきたのがＮＧＯ自身が抱えている問題即ち、ややもするとＮＧＯは反政府団体として認知されていまして、そのバリアを超えるのに大変な努力が必要だったという話です。それは特にアフリカのＮＧＯの人から出ておりました。やはり土壌関係の調査をやったときに、そのとき援助側が、ちょっとどこの国だったか忘れましたけれども、恐らくそこの援助国の中にＮＧＯがい

て、そのＮＧＯがその国のＮＧＯと多分コンタクトを持ったのでしょう、そこの被援助国のＮＧＯをうまく使って、彼らと一緒になって政府にいろいろプロポーザルを出す、そういうことによって政府の方も我々の国の中にあるＮＧＯは反政府団体でもなさそうだというようにやっと考えるようになったということで大変な努力をしておりました。相手の国のＮＧＯと協力しましょうといったって相手の政府自身がＮＧＯのリストも持っていない。日本のＮＧＯの人もどこの国にどういうＮＧＯがあるかは知らない。そういう状況では協力もうまくいかないですね。どうもやはり、ＮＧＯ自身とのネットワークづくりにおいて１つ僕が感じるバリアというのは、やはりその国の中で政府とＮＧＯの関係はどうなっているのか、なかなか難しい問題ではないでしょうか。

○須藤　援助する側から見れば、援助される側の問題といいますか、援助する側の問題というのは援助される側の問題がまさに反映されてきているということだと思うのです。例えば政府援助あるいは民間での資本進出なりにしても、それを受け入れる側の政府の権力者あるいは資本家の考え方が、開発援助資本と開発の何に反映されくる。もう一つ、今言われていますＮＧＯの問題にしても、外国からのＮＧＯの援助をどう受け入れるか、あるいは受け入れる側の開発途上国でのＮＧＯをどう育てていくかという話も、ＮＧＯ組織としての問題でもありますけれども、それを育てていこうとする政府の権力者の方針なり開発への方策のあり方、これは非常に重要なポイントになってくる。これから環境問題ということで、開発計画を立てる際の１つの重要なポイントとなるのが環境影響評価という問題ですけれども、その中で環境影響評価をする際に影響評価の過程で開発の影響を受ける住民、今でいうグラスルートの底辺の人々の開発に対する考え方も考慮しながらその開発計画を立てていくというふうな動きがありますし、これから政府ベースの開発援助もそういう方向でやっていこうと、まさに国際機関なりほかの先進国の援助機関は、日本の政府機関等も含

めましてそういう方向に進んでいます。実際にそのグラスルートあるいは底辺の人々の考え方を具体的にどういうふうに反映するかという手続上の問題はありますけれども、環境問題という取り組みの中でいい方向に進んでいるのではないかと思います。私たちも環境問題をやりながら、先生がおっしゃっていたように開発の影響を非常にシビアに受ける人の考え方を開発への希望あるいは自分たちの生活をレベルアップしていくという希望を組み入れていけたらなと思っているところです。

○今井　同じ感じなのですけれども、その会議に出たときにアジアとアフリカの例が出たのですけれども、開発計画を作る時に住民の意見をどう入れるかという話が出まして、幾つかケーススタディが出ました。僕たちはいわゆる民主的な制度は途上国にないのではないかと思っていたのです。ところが全然違うやり方で合意形成をやっているのです。それは村長さんあるいは部族長みたいなのがいまして、そこの定例の会議がある。そこに持っていくというのです。範囲が広くなると、その部族長の集まりの会議がまたあって、多分アフリカの話だったのではないかと思うのですけれども、そういうことをする既存の合意形成なり判断形成、そこのシステムをうまく使ってコンセンサスをつくっていったのだというケーススタディをやっていたのです。僕はちょっとびっくりしたのですけれども、僕たちはどうも住民参加というとすぐレポートを配って、それに対するコメントを説明会で聞くとかが日本のやり方なわけです。そうではなくてもっと全然違うやり方があり得るのではないか。それはまさに相手のことをよく知らないと気がつかないのではないかなと僕は思ったのです。

○西牧課長　日本人はどうしてこんなにむちゃくちゃエビを食べるのですかね。

○村井　エビが好きだという説があるのですけれども、僕はそれはどうもインチキ臭いと思います。結局金が集まるところにエビが集まるという歴史があるらしくて、昔はロンドンがエビの大消費地で、そのあとニューヨークになって

今東京だというところを見ると、やはり金とすごく関係があるみたいですね。

余りまじめには取り組んだ問題ではないですけれども、ただグリーンピースの人たちとか西欧の一部が言うように、クジラは大きくて哺乳類でかわいそうだというのは全く論理になっていないと思うのです。それだったら牛を食って何しているという感じになるわけで、そういう類の議論をしてはまずいと思う。ただ日本が商業捕鯨でうんととったのは事実なわけですから、そこら辺のことを資源との関係でやはりどの程度ならいいのかというのはある程度は合理的に出ると思うのです。そこら辺から、全くクジラだから食ってはいけないというのはおかしな話で、言いがかりでしかないと思います。

○西牧課長　捕鯨の問題なんかは先生はどう思われますか。今、調査捕鯨というような……。

○村井　ただエビは、食べさせられると余り強調してはいけないのですけれども、歴史的に追ってみますとやはり冷凍エビをどんどん入れようという業界の動きは６０年代ぐらいからずっとあります。それに通産省が補助金出したりとかエビ開発輸入促進ミッションなんて何度も送っていますし、それは財界、業界総力を挙げてエビをたくさん食べされる仕掛けというのはあったと思います。結局日本人は買うものがないというか、売りたいだけ売ってエビしか買わないというような批判すらあるぐらい、エビは１つの見返り商品として大事だったということはあると思います。

○須藤　先生のスライドの中には、スルー諸島のある町でしたか日本の古着が売られていたということですけれども、あの古着はどこから来たのでしょうか。

○村井　ちょっとわからないのですけれども、あれは特別な業者が日本の中にいると思うのです。ああいうのを集めて海外に持っていく。恐らくシンガポール経由ではないかと思うのです。それはだれか追いかけてみるとおもしろいと思うのですけれども、かなり特殊なルートだと思います。

○須藤　名札までついていましたね。フィリピンなんかですと戦時中戦争でフィリピンにいて、戦友に慰霊やなんかで毎年訪れる団体が結構います。その人たちが日本の利用できる古着を現地に持っていけば使ってもらえるというので大分持ってきているのを見たことがあるのですけれども、ひょっとしたらそんなのが流れたのかなと思ったのですが。

○村井　もっと大規模にやっているようです。ここだけでなくて、いろんな小さな島に行くとよく結婚式なんかに呼ばれるのです。そうすると中古の背広を着ている人がいたりして、ネームが中川なんて入っていたり、建設現場の作業着で何とか住宅とかというのが入っていたり、相当大規模に業者がやっているのではないかと思うのです。ただのチャリティで持っていったもの以上の規模だと思います。

○今井　自転車か何かでしたか、廃品回収業のインド人が来ましてただで入手し、それを全部持っていって向こうで高く売るわけです。自転車だったかどうか忘れましたけれども……。

○村井　そういう特殊なルートはあるみたいですね。

○今井　時間が過ぎたのですがちょっと先生の御意見を伺いたい点があります。前ＰＥＰＡＳにいた琵琶湖研究所の中村さんから環境関係者の中では今の開発は質的にいろいろ問題があって、もっと環境のことを考えなくてはいけなくなってきているというお話を聞く機会がありました。そこで途上国の開発担当の方はどう思っていますかという質問をしましたところが、なかなか環境のことを考えるとそこまでいってないというか、中村先生の個人的な印象としてはかなり否定的な話だったのです。ところが国際会議に出ますと異口同音にみんな環境は重要だと言うのです。そうすると、恐らく現実的には何か意識的にわかってはいるけれどもどうしようもないという面があると思う。１つの問題は、今までの国際開発経済理論によれば今のやり方でいいということになっている。

しかし実際はいろいろの問題がある。それにとってかわる新たな開発経済理論、要するに環境のベネフィットとかそういうのを入れた理論あるいはそういう視点を入れたような理論があって、それでもってやったらうまくいったというような具体的事例が必要だと思います。長期的にも短期的にもなかなかうまくいくわいというような説得材料がないと、“やはりわかってはいるけれども”という状況が恐らくずっと続くのではないかなと思うのですけれども。

○村井　でしょうね。そういうモデルがあるわけではないですから。

○今井　何か日本の経済開発に携わっている方で、そういう新たな開発経済理論というか、そんなのを研究されている方とか、そういうのを一生懸命やっている方というのはいらっしゃるのでしょうかね。

○城殿　若干、そういうエコロジーと経済の問題は……。

○村井　エントロピー学会というのがありますね。あそこに来ておられる室田さんとか中村尚司さんだとか土田さんとか、あそこら辺の人ではないですか。ただ直接第三世界をやっているのは、中村尚司さんがインド、スリランカをやっておられるので。一昔前までは環境問題をそういう国際会議で持ち出すと、おまえらだけ工業化してけしからん。おれたちは公害より煙突の方が大事なのだという議論が一時は有力だったのですけれども、そういう議論というのは最近はさすがに出てこなくなったように思います。だから、それだけ意識が変わってきたのだと思いますけれども、では一体どういう発展モデルなり開発戦略というのがいいのかという、そこになるとまだただオルターナティブだというだけみたいな、私自身もそうなのですけれども、なかなか具体的なところまで議論がおりてこないので。

○須藤　どうも長い間ありがとうございました。予定時間を過ぎましたので、それではこれで講演を終わりにします。